

41358

教科書文庫

4
810
31-1915
20000
40725

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

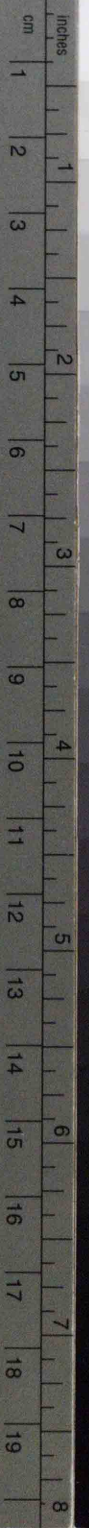


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



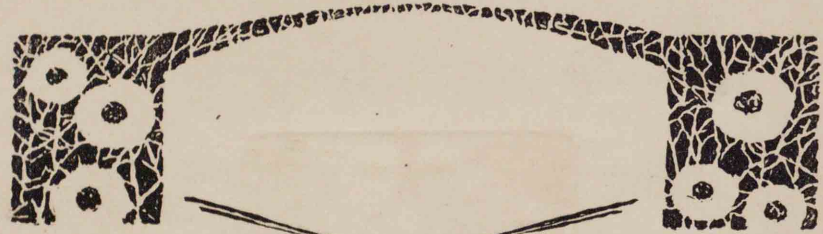
3759  
Fu10  
資料室

增補  
大正讀本  
卷五



資料室

375<sup>9</sup>  
Fu10



增補

大正讀本

藤村作編

發兌 大日本圖書株式會社

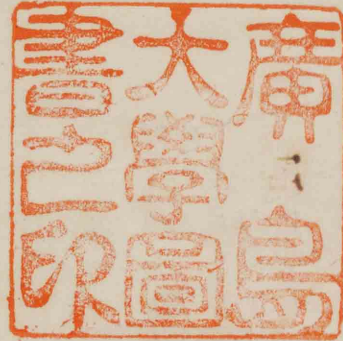
へ 子 諸 徒 生

- 一 各文章の末には作者の氏名又は本文を採録したる書名を挙げたり。但し該學年の程度に適應せしめんが爲に、原文を改修したるものには、某氏若しくは某書に據ると記せり。
- 一 上欄に摘出したる語句は、尋常小學讀本及び本書に未見の新語句なり。
- 一 漢字の部首見分け難きものは、該文字の下括弧内にこれを提示して、字書検索の便に供したるものあり。
- 一 語尾の變化する語は、自習の便宜の爲に辭書に出でたる形を示せり。
- 一 文中\*を付せる語句は、卷末に註釋せるものなり。
- 一 卷末註釋付の語句は、五十音順に排列せり。

大正元年十月

編 者

生徒諸子へ



補増大正讀本 卷五目次

一	大日本帝國憲法の制定	一
二	イートン學院の學風	五
三	近江の國	八
四	書籍の取扱	一二
五	人物の識別	一六
六	晩春の別離	一八
七	オリンピアの回顧	二四
八	命の安賣	三〇
九	命の安賣	三四

一〇	平安朝の和歌	三七
一一	源平の三烈士	三九
一二	夏の小金井	四四
一三	地震	四七
一四	地震	五二
一五	夏の夜	五七
一六	夏の曙	六一
一七	執著心	六四
一八	我が住家	六六
一九	簡易生活	七二
二〇	日本文	七八

二一	英と佛	八四
二二	佛になるやう	八八
二三	平和と人道	九一
二四	森	九三
二五	月四夜	九五
二六	雪山行	一〇三
二七	獨逸と日本	一〇七
二八	仙術	一一四
二九	朝鮮の山河	一一七
三〇	鳥居強右衛門	一二一

(目次終)



増大正讀本 卷五

藤村 作編

一 大日本帝國憲法の制定

先帝御製

あし原のみづほの國のよろづ代も

みだれぬ道は神ぞひらきし

我が國が立憲政體を創始せんとするや、列國等しく目を側め、中には東洋の民族の憲政に適するやを疑ふ者さへ無きにあらざりき。然るに明治十五年、先帝早く既に伊藤博文に命じて、憲法の草案を起稿せしめ給へり。

立憲政體  
側む

體制 親裁 軫念 俱 欽定 國是 兆 宣布

この後、我が國憲法の體制に就きては、朝野の間に多少の論争あるを免れざりしが、草案一たび成りて樞密院の審議に附せらるゝや、先帝は常に公明・深仁の聖旨を以て親裁し給ひ、臣民は皇祖・皇宗の惠撫・慈養したまひし所の臣民の子孫なれば、其の幸福を増進し、其の智徳を發達せしめんことを軫念あらせられたり。また國民みな常に皇業を翼賛して、與に俱に國家の進運を扶持せんことを望ませられ、臣民の權利と財産の安全とを保護するの大御心より、こゝに千載不磨の大典を欽定して、祖宗以來の國是を確立し給へり。明治二十二年、紀元節の佳辰に當り、神明に告げ、億兆に示して、大日本帝國憲法を宣布し給ふ。

朕國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ朕

肇造 貽ス 獎順 和衷 鞏固 曠古

カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス

惟フニ我カ祖我カ宗ハ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神聖ナル祖宗ノ威徳ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎順シ相與ニ和衷協同シ益我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

これ世界の歴史に於ける曠古の盛事なり。萬民歡呼して

優渥

之を迎へ、皇恩の優渥なるに感泣せり。  
憲法は天皇之を臣民と與に守り給ひ、皇室の專意を以て之を變更せらるゝことなし。若し將來、世運の推移と共に、其の條章を改正するの必要を見るに至らば、天皇親ら發議の權を執りて帝國議會に附せられ、議會は憲法の定むる要件に依り、之を議決すべきものなり。

紛争

購ふ

凡そ何れの國も、立憲政體を創むるに方りては、必ずや劇烈なる紛争を起して、許多の生命を犠牲とす。故に其の憲法は血を以て購へりと稱せらる。大日本帝國憲法は即ち然らずして、臣民を慈みたまふ叡慮より下し給へる恩賜なり。我等臣民、殊に篤く之を遵奉せずして可ならんや。况や重ねて詔を下し

遵奉

循フ

愆ル

國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ  
と宣ひ、又

朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ  
と仰せられたるをや。  
(國民讀本)

## 二 イートン學院の學風

イートン學院カレドニアは英國に設立せられたる最も古き中學教育機關の一にして、一千四百四十年\*ヘンリー第六世の創立に

馴致

係る。爾來星移り物換りて、英國の史上幾多の變遷を來せりと雖も、此の學院のみは創立以來依然として終始一貫し、殆ど教育の主義方針を改めず。既に一定の學風を馴致して、數百年の星霜を經過し、以て今日に至りたるものなり。隨ひて偉人傑士を出したるもの尠からず、頗る名譽ある歴史を有せり。彼の英國史上に赫々の名を留むるピット・フオックス・ウエリントン・ソールスベリー・グラッドストーン・ローズベリー等の如きは、何れも此の古色蒼然たるイートン學院の出身なりと云ふ。若し一たび院内の大食堂に入りて、四圍の壁上に掲げられたる數多偉人の肖像に接せんか、一種崇嚴なる靈感の自ら湧き來るものあるを覺ゆべし。學院の特色美點や、固より一にして足らず。今試みに其の

靈感

誘掖

一端を擧ぐれば、同學院は所謂寄宿舎制度を採れるものにして、全校の學生を、何れも各三十人内外を一團として、教師の家庭に寄宿せしめ、學校教育の外、更に教師の監督誘掖を受けて、其の學業を修め、また其の徳性を涵養せしむ。其の教室、卓子、椅子、教具等の如きも、概ね舊時の物を用ふるが故に、設備の外観は多く見るに足るものなしと雖も、これが知らず識らず堅忍着實の美德を養はしめ、人格修養に有効なるは、蓋し不言の教訓、自ら其の中に存するが爲なるべし。其の他校内に於ける禮拜堂の極めて壯麗なるが如き、圖書館の殊に珍書古籍に富めるが如き、何れも學生の品性陶冶と、知識啓發とに裨益する所多き、推知するに難からず。學生等が卒業して學院を辭し去らんとするや、必ず記念とし

陶冶



て、自己の姓名を學院の壁上に彫記するを例とするが故に、壁上偉人の名を留むるもの甚だ多く、是亦常に一種の感化を後進に與ふと知らる。

(歐米自治救済小鑑)

### 三 近江の國

鬱陶しい雨が、ざあ〜と美濃の野山を閉込めて、恐ろしく蒸暑い日の午後である。汗かきの私は、べつとりと脂のにじんだ顔を窓外に出して、冷かな雫を火照つた兩頬に受けた。

汽車は關が原を出てから、間も無く近江の國境に入る。兩側の平地には菜の花が一面に咲亂れて、見渡す限り遠く續いて居る。丁度米澤地方の桑畑のやうに、菜畑は近江の國

雫

傳説

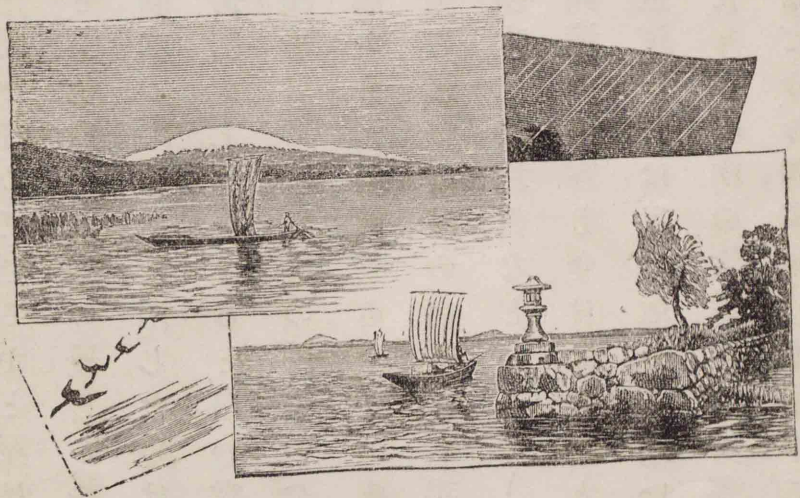
憧憬

蜈蚣

お伽噺

一圓を埋めて居るかと思はれる。天氣の好い日であつたら、黄色の花が眼の覺めるやうに映えて輝くであらう。湖水の端の見え出したのは、米原を過ぎてからである。折雨が上りかゝると、白い雲の裏から薄い日の光がさして、幽暗な拜殿の奥の神鏡のやうに、青葉の生ひ茂つた丘陵の蔭から、湖の面がきら〜と雲霧の中に覗はれる。やがて、遙に彦根の城の白壁が、右手の小高い山の一角に現れる。伊吹・比良・比叡など、いろ〜の神話や傳説を想ひ出させる國境の山容も、今日は朦朧と打煙つて姿を見せない。近江の國は、私に取つて幼い時分から憧憬きんけいの的となつて居た。伊吹山の大蛇だの、勢多の唐橋の龍神だの、三上山の蜈蚣だの、お伽噺や歴史讀本に書いてある奇怪な口碑が、どれ

土佐繪



程少年時代の私の頭に、想像の火の手を煽つたであらう。霞立つ春日のきれる百敷の大宮所見れば悲しも、<sup>\*</sup>人麿が詠歎した滋賀の都は、平家物語の忠<sup>\*</sup>度都落を讀むに及んで、一入なつかしい思がした。近江の國といへば、私はいつでも、土佐繪のやうな春霞が、湖水を周る山山浦々に棚引いて、明るい、暖い、そして何となくうら悲しい夢のやうな土地を心に描いた。

古典的趣味

枯淡  
考證

神祕

背景

奈良や京都のうす暗い古典的趣味を喜ぶ者は、あのうららかな近江の國を何と思ふであらう。鏡のやうな湖水の沿岸には、枯淡な、歴史的考證の束縛を受けない、自由な、豊富な、さまざまの神祕が潜んで居るやうにも考へられる。八幡・草津・石山・馬場、一つ一つの停車場に下りて見物したい處はあるが、兎に角一旦京都に安着してからの事と極めて、私は車室の窓から、傍目もふらず、移り行く風景を眺め入つた。あゝ、近江の國、丁度菜の花のやうな美しい<sup>\*</sup>ロマンスの生まれる近江の國、私は一度此の國の風光を背景にした物語を書いて見たい。勢多の鐵橋を渡る時、はつと雲切れがして、琵琶湖遊覽の白

塗の蒸氣船が、青々とした水面にさゝ波を立てながら目の下を走つて行つた。

午後七時頃七條停車場に着いて、生まれて始めて西京の地を踏む。雨はいよ／＼土砂降になつて、陰鬱な京の小路の家竝に蕭々と濺ぐ。澁のやうに燻ぶつた色の格子造が軒を竝べ、家の中は何れも薄暗で、何百年の昔の香が、瓦や柱に沁込んで居る。到る所に佛師の住居の見えるのも、私には珍しくなつかしかつた。

(谷崎潤一郎)

澁  
燻ぶ

佛師

いろせ

#### 四 書籍の取扱

我が學のいろせなる、堤朝風のもとに、ある人の來りて、何くれの物語しけるついでに、朝風の、玉かつま初若菜の卷に、人



に借りたる本に、既に讀みたる界に、折目つくるは、いと心なきしわざなり。本に折目つけたるは、なほるよなきものぞかし。」と、云はれし條を取出で、「これ見給へ。人に書借りたらんには、かくこそ心つくべきわざにはあむなれ。いとめでたき教言にははべらぬか。」とて見せられたるに、其の人いたく感じて、いかにも、これいとよき教になむはべる。直ちに此の卷を我に貸し給はれかし。忘れぬ間に書きぬき侍らむ。」と云ひさま、そこを二重に折りかがめて、懷にねちこみて歸りぬとぞ。朝風も、いたくあきれたりしとて、かくと物語せられき。世によき事を聞きて、め

かうやう

でたしと思はぬ人もなければ、なほざりに思ふから、かうやうのしわざもあるなりけり。

誠に、書は一ひらよりは二ひら、ふたひらよりは三ひらと、よむがまに、力を得て、いとめでたく、尊きものなるを、なほざりにするなむどは、學問する者のいとあるまじき事なり。

彼の法師どもの經卷をもてあつかふに、かりそめにも、直ちにむしろに置かず、机におきて、いつもいたゞきて後讀むなむどにも耻づべき事なり。

まして人に借りたる書なむどは、いかにも、あしくならぬやうにと心しらひして、みだりにはすまじき事なり。

さるは藏書家といはるゝきは、人々こそ、書うる事も心やすかめれども、我がともがらの如く、はかなく貧しきものの書を藏めおく事は、眞に、難き

心しらひ

こよなし

わざにて、殊に皇國のふみは、板に彫れるが少くして、漢籍よりはこよなう得がたきを、辛うじて得たるを、心なくみだりに扱はれたるは、いと心なく、口惜しきものなるを、さる事にも心つかで、物にさへ包まず、懷に押入れ、また讀みたる界に折目つけて返すなむど、其の人の心さへおしはからるゝ心ちして、いとあぢきなきわざなりかし。

かくいはば、己を、いと吝なり。」と云ふ人もあらむか。

然る人はいかにともいへ、すべてものはかゝる小さき事より心せずば、えあるまじき事なり。

これらの事ども、朝風の、唐大和の書に見えたるを書きあつめて、「讀者用意」と名づけて一卷あり。

志あつからむ人は乞ひて見るべし。

あぢきなし 吝

(平田篤胤)

五 人物の識別

人は鬼神に非ざれば、他人の心事の微を知るに由なし。正直の君子にして評判の宜しからざる者あり。不正の小人にして巧みに外面を装ふ者あり。况や昨非今是、人心の變化窮り無きに於てをや。其の形跡の外に現れて分明なるものは格別なれども、心機微妙の邊に至りては、之を識別せんこと、到底人力の及ぶべき限りに非ず。

されば今これに接する法を如何にすべきかと云ふに、先づ我が智慧の有らん限りを盡くして、他の言行を視察し、勉めて正を近づけ不正を遠ざくるの工夫を運らして、扱こゝに半信半疑、區別に窮する場合には、其の者が直接に我に對し

昨非今是

心機

成跡

て不正を仕向けたることなく、又他に對しても明白なる不正の形跡を現さざるに於ては、兎に角に之を正者として視るべし。斯くの如くして、時に或は豫想に齟齬する事ある可しと雖も、本來鬼神の明なき人智を以て信偽を決することなれば、他を善く認めて誤るも、悪しく視て誤るも、誤なるに於ては同様なれども、其の成跡に至りては、個人の爲、社會の爲、利害の相違大なるものあり。小人を誤り認めて君子と爲すとも、曾て損益する所無きのみならず、君子視せられたるが爲に、小人情を矯めて一時君子の事を行ふこと有らんには、其のこれを行ふ間は儼然たる君子にして、社會に一個の君子を増したるに異ならず。之に反して君子を遇するに小人を以てすれば、其の人の心を痛ましめ、且君子をし

て君子の用を爲さしめず、公の爲には一人物を空しくし、私  
の爲には一人の益友を失ふものなり。其の利害辯を俟た  
ずして明らかなり。

然れども、以上の立言は、正者不正者の識別極めて決し難き  
場合に適用すべきものにして、唯吾輩は、社會交際の上に就  
きて、俗諺に「火を見たらば火事と思へ。人を見たらば賊と  
思へ。」と云ふが如き局量の狭き者を警むるのみ。君子を愛  
し、小人を憎み、苟も賤丈夫の言行を容れざるの一段に至り  
ては、吾輩とても亦他と異なることなし。

(福澤諭吉)

立言  
てかきまはる  
遊(あそび)もよし

局量  
局量(こころ)もよし

### 六 晩春の別離

時は暮行く春よりぞ、また短きは無かるらん。

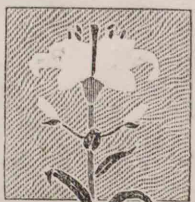
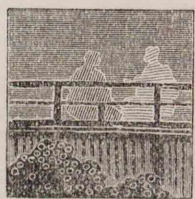
佐保姫

恨は友の別より、更に長きはなかるらん。

君を送りて花近き、高樓までも來て見れば、

緑に迷ふ鶯は、霞空しく鳴きかへり、

白き光は佐保姫の春の車駕を照らすかな。



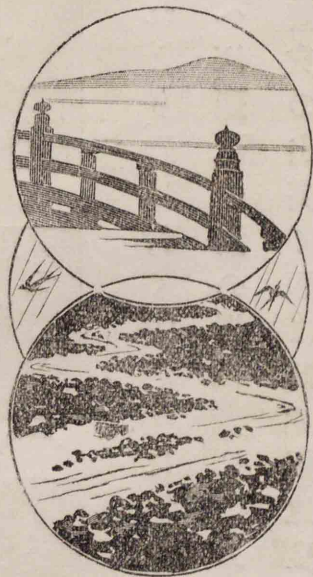
これより、君は行く雲と共に都を立出でて、

思へば、琵琶の湖の岸の光に迷ふ時、

東、膽吹の山高く、西には比叡比良の峯、

日は行通ふ山々の深き眺を打仰ぎ、

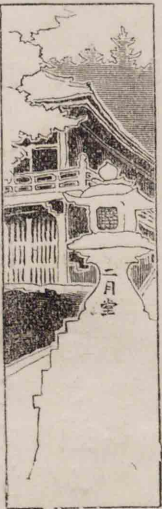
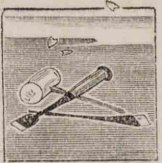
いかに勝れし想をか、沈める波に湛ふらん。



流は空し、法皇の夢杳なる鴨の水、  
水にうつろふ山城のみやびの都、行く春の  
霞める姿見盡くして、畿内に迫る伊賀・伊勢の  
鈴鹿の山の波、遠く海に落つるを望む時、  
いかに萬の恨をば、空行く鷺に窮むらん。

伽藍

春去り行かば、青丹よし奈良の都に尋ね入り、  
とし月君がこひ慕ふ御堂のうちに遊ぶ時、



古き藝術の花の香の、伽藍の壁に遣りなば、  
いかに韻を身にしまして、深き懐に沈むらん。



さては、秋津の島が根の南の翼、紀の  
國を  
回りて進む黒潮の鳴門に落ちて行  
く處、

泄らす

天際遠く、白き日の光を泄らす雲裂けて、  
目も遙なる遠海の波に踴るを望む時、  
いかに胸うつ音高く、君が血汐の騒ぐらん。

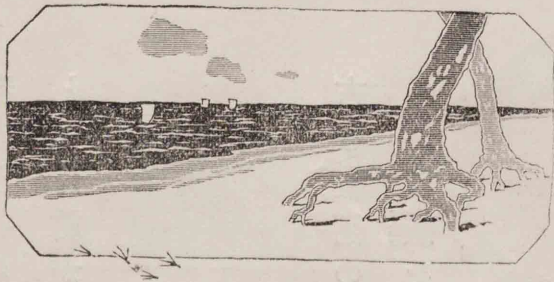
歌枕

又は名に負ふ歌枕、

波に千歳の色映る明石の浦の朝ぼらけ、  
松萬代の音に響く舞子の濱の夕まぐれ。  
或は、波間に雲落ちて、淡路の島の影暗く、  
狭霧のうちに鳴き通ふ千鳥の聲を聞く  
時は、  
いかに浦邊に流浪ひて、遠き昔を忍ぶら  
ん。

狭霧

流浪ふ



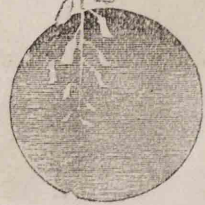
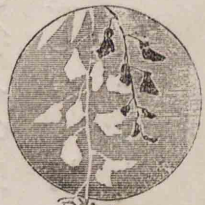
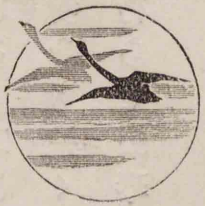
げに君が爲、山々は雲を停めん。浦々は  
磯に流るゝ白波を揚げんとすらん。縦さらば、  
旅路遙に野邊行かば野邊の祕事、森行かば  
森の祕事探りもて、高きに登り、天地の  
もなかに遊び、大河の流を窮め、山々の  
神をも呼ばひ、谷々の鬼をも起し、歌人の  
魂をも遠く返しつゝ、清しき聲を打上げて、  
朽ちせぬ琴を搔鳴らせ。

さらば名残は盡きねども、袂を別つ夕まぐれ、  
見よ、陰深き欄干に煙をふくむ藤の花、



北行く雁は大空の霞に沈み鳴き歸り、  
彩なす雲も愁へつゝ君を送るに似たりけり。

(島崎藤村)



### 七 オリンピアの回顧

\* オリンピアのゼウス神はハンヘレニツクの神、希臘全土の信仰を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加のシリオン、西は伊太利のシラキユース、東は小亞細亞のあたりまで、苟も希臘人の住んだ處からは、幾千幾萬の人々

廢墟  
發掘  
趾

がこゝに集ひ來たのである。オリンピアの廢墟の奥に、一部分のみ發掘された演技場の趾は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦かづら高く繁り合つて、羅馬



神の利勝のアピンリオ

時代に建てられた凱旋門の半ば壞れたるに纏はるのが、如何にも名譽の月桂冠であるかのやうである。

この大演技は四年ごとの大祭日に催された。此の日は神聖なる平和の日として、希臘全土の人々が敵身方を忘れて、これに列したので

徘徊

ある。希臘全土の一致結合は、このオリンピックの演技によつて出来たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にこゝに集り、各州の選士が雲を呼び風を起して、龍虎相搏つたのは、如何に壯快に、且目覺しかつた事であらう。集つて来た人々の中には、詩人もあつたであらう。學者もあつたであらう。ヘロドトスの如き歴史家も、デモステネスの如き雄辯家も、テミストクレスの如き勇將も、さては政治家、法律家、富めるも、貧しきも、名門も、平民も、あらゆる階級あらゆる職業の人々が、互に顔を合はせ、談笑周旋、この間を徘徊した様の、如何に面白く且賑かであつたらうか。若しこゝに名工があつたとせよ。彼の靈腕はこの群集によつて得る所がなかつたであらうか。人生を研究する好

哲學  
戯曲

機、人間を捕ふる機會は、彼等の決して逸しなかつた所であらう。想ふにこの演技は、單に演技そのものの進歩のみを來したのではない。哲學、歴史、戯曲、音樂、彫刻などの發達に影響したことも、尠少ではなかつたのである。

物資

この祭には市場が立つ事になつて居た。物資の交換、賣買が、如何に全國の商業、農業を益したことであらう。かくて思想、智識の交換、延いては感情の融和が、國民の一致に暗々裏に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのである。彼等はヘルシヤ戦争に於て、國民的敵愾心の絶頂に達した。此の時小忿を忘れて大敵に當り、よく東方の強を挫くことが出来たのは、このオリンピックの演技に負ふ所が少くなかつたと思ふ。

貢獻

敵愾心  
忿

しかもその演技者は、決して職業的の者でなかつた。ただ各州から出た青年選士であつた。そして、羅馬時代に入り、職業的となつた時は、この演技のはや衰へ始めた日であつた。この演技の精神は、全國民をして眞の勇者たらしむるにあつて、全國民の體格意志の發達は、この演技によつてますます助長せられた。古代希臘に於ける教育のモットーは一言にて盡くす。「健全なる肉體には健全なる精神宿る。」これである。ただこの健全なる精神を養成せんため、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が現れて居る。希臘の文學にもこの意味が見えて居る。

オリンピアの祭典は、かくて希臘の歴史は、じまつて以來、永

龍攘虎擊

雲集

羨々

く國民的祭典として羅馬時代まで連續した。その事蹟は、希臘の文化と共に、永久に亡びることがないであらう。我が國には、このオリンピア演技のやうなものは、無用のことであらうか。我が固有の武術にせよ、各學校のベースボールにせよ、フットボールにせよ、素人相撲にせよ、各階級を通じて、各地方を通じ、擧つてその選士を出して龍攘虎擊の壯快なる競技を演ぜしめ、之を觀る者もまた全國到る所から雲集する事の出来る一のスツデイオンの無いのは、盛世の大遺憾ではなからうか。余偶、オリンピアに遊び、雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草蓁々たる演技場を徘徊して、古希臘の文化が淵源する所、こゝに在りと想到したとき、余の心耳に囁く天來の聲があつた。それは、我が國民の

崇敬し信仰する伊勢神宮に一大スツデイオンを建て、その大祭日に全國民の競技を演ぜしめよ。といふのであつた。

(黒板勝美)

### 八 命の安賣 一

びんた 律義  
蕎麥切  
涎 驅附三杯  
上戸  
箸 掟

びんたの少<sup>ま</sup>禿赤岩彈介、血氣盛に似合はぬ天性の律義にして、行くに大道の眞正中、ぬかるみも避けては通らぬ男なりけり。ある日の暮、町の風呂へ行かんと立出てたるに、蕎麥切屋の前を過ぐれば、好物のかをり鼻を衝き、夜食前の咽喉鳴りて、頻りに涎を催せば、大豪の者もこれには勝てずと、一文字に飛入り、驅附三杯は上戸の掟、肴あらしの箸の二掛け、六膳と物しければ、腹の蟲やう／＼鳴りを静めぬ。勘定

挺

風情

龜鑑

くれうと懐中探るに、南無三寶、財布を遺れたり。湯錢だけは袂に入れたれど、それにては足らず。例の律義の心にしては、此の時の思、鐵砲十八挺銃口を揃へておつ取巻かれんも及ばじ。計略こゝぞと思案に暮れたり。亭主に會うて仔細を語らば、何の事もあるまじけれど、我は何人ぞや、武士たる者が、蕎麥切の代錢に不足して、素町人風情に頭を下げん事、一代の恥辱といつべし。第一さばかりの用意なくして物食ひたるなど、丈夫の心掛にはあるまじき不覺なり。傳へ聞く、赤穂の四十七士は、討入の懐中にそれぞれ金子を所持せしとて、今に良雄を稱揚して武人の龜鑑とせり。例へば、酒に亂れて前後を忘じ、折から狼藉の者亂入して、抜合はさず淺ましき最期を遂げんまでも、せ

刀 鏑

欄

譏 隼人

めては刃の鏑となりなんこそ、なほ本懐ともいふべき所はあれ。よしさる事あるにもせよ、我下戸なれば酒に亂るゝ憂慮なし。三五人の曲者寢込に踏入るとも、何てふ事のあべき。欄に手は懸けても、鬢髪引搦んで二人。三人は食殺しても見すべし。平生武道の嗜深く、義を見て命を惜しまず。あはれ事もあらば、身の棄様を潔うして、日本武人の模範ともなり、あれ見よ薩州の彈介といはせ、誰にてもあれ義死の折には、この國に向つて三拜し、佛名代りに赤岩彈介連景と唱へさせなんの心掛も、食慾故に水泡と消えぬは汚名未代の譏草、隼人の中に古今一人の腰拔を出來さん事か。武運盡きぬる今夜の始末と、無念の涙も泣くとは女々し。かくてあるべきにあらず、亭主に錢なきよしを語りて、申譯

歸宅 慥に

の切腹此の場を去らじと覺悟極めしが、待て暫時、勇士は疊の上の最期を恥づともいふなるに、いやしき蕎麥切店にて果てん事、これ重ねての笑はれ草なり。且は此の店の迷惑、本意にあらずと、大刀杖に深き思案の體を、亭主の外目には食もたれとも見たらんかし。身近の物音に顔を上ぐれば、いつ來りしやら商人風の若者が、傍にて餘念なく打食ふ側に、煙草入を置きたり。中なる錢に目留り、我未だ武運盡きず、竊にかの錢を借りて勘定すまし、一先づ歸宅の上、心置なく腹切るべし。町人ゆるせ、不義の盜にはあらざるぞ。彈介慥に借用申すと、心中に斷い、うて、忍びやかに其の錢を取出し、さり氣なく拂すまして立歸りけり。

九 命の安賣 二

捨つる命に獨身の氣安さ、誰に愛着の未練もなし。ただ一人の伯父の近き邊に住める方への一通、手早く認めける。其の文に曰く、

拙者今宵いかにも一分相立たざる事仕出來し申候に於ては、只今潔く切腹と覺悟仕候。夜中御太儀の段御察し申候へども、淺からぬ縁類のよしみを以て、即刻御立合の儀偏に願上げ奉り候。委細は御面會の上にて萬々申述べべく候。謹言。

人して持たせて、最期の支度を急ぎ、伯父の來んまでを此の世の名残と、先祖代々の位牌に向ひて、此の度の不始末の段

太儀

偏に

位牌

長閑  
邊る

摧く

血相

介錯

段を詫び、聽て祕愛の一管の天吹てんぶきを取出し、折しも月澄み渡る窓を開きて、長閑に得意の一曲を奏つれば、空行く雲も過りて、庭には落葉の音しきりなり。

「おのれわが情を思はば、諸共に此處に摧けて、一片の煙となるを恨む事勿れ。我もこれにてぞ。」といふまゝに、脇差拔放ちて微塵に切割り、火鉢にさしくへ、我を彼の世へ送り火焚きて、合掌してぞありける。

斯かる所へ伯父十郎右衛門、血相變へて駈來り、門口より大聲立て、「彈介切腹とや。驚き入りたり。仔細を申せ。」と躍り入る。彈介平伏の頭を得上げず。「申すは面目なし。ただこの儘に御介錯。」「おのれ何いふぞ。面目なければこそ切腹すれ。一命棄つる期にいらざる遠慮立て、仔細聞かずば

披露

立合はじ。此の儘歸る。」といふ。彈介額の汗を拭ひ、蕎麥切の一條を語るに、十郎右衛門足摺して口惜しがり、「情なきこと、人にも語りがたし。犬死なるぞ。」と腹立聲のあらゝかなり。「長らへば猫にも劣るべし。不覺は今にして悔ゆとも詮なし。彈介亂心の上の自害と、よろしく御披露なし下され、切腹の儀御許容下さるべし。」と涙を流す。「一文盗むも賊なれば、一國を盗むも賊なり。おのれ弓矢神にも見放されたる身の是非なし。死すとも此の恥辱は雪ぎ難からんに、生きてなかく、人に對すべき顔はあらじ。今は最期を急げ。」と言放ちて、くわと睨めたる眼中に、怵へかねたる涙はらはらと膝にたばしる霰の、見る間に消ゆる命は惜しや。「せめては血の出る西瓜なりと斬つても死ぬべきに、筋骨もな

怵ふ

盃蘭盆  
精靈棚  
乾瓢

き蕎麥を敵手に不承なり。」と、無念の述懐、聞くに彈介いよいよ恥入りて、さし俯きてゐたりしが、「御免」といふより早く、遣恨はなほ此の中にぞと突立てたり。「彈介、盗みし錢は返さぬ氣か。」机の上なる紙ひねりに「七十二文。安い命。」と引廻して生害見事なり。千人にも見せたかりし死様。十郎右衛門一生蕎麥切を斷ちて、盃蘭盆の精靈棚には乾瓢を懸けしとかや。

(尾崎紅葉)

一〇 平安朝の和歌

人の親の心は闇にあらねども、  
藤原兼輔  
子を思ぬ道よ、迷ひぬるかゝ。  
櫻花さだにけらしお、足引也  
紀貫之

足引の

かひ

山のあひもと見ゆる白雲。

山里の春の夕暮來て見きば、  
能因法師

入相の鐘は花ぢちりける。

手すさび  
夏は夜の月まほほどの手すさびは、  
藤原基俊

むすぶ  
岩間の清水はくむすびしつ。

道は清水ながるゝ柳かぢ、  
西行法師

志ばしとてまぢ立ちとまりつれ。

鶉なく眞野の入江の濱風は、  
源俊頼

尾花波をる秋の夕暮。

まばらなる横は板屋は音はまて、  
藤原俊成

漏らぬ時雨や木の葉ある羅。

風さえて浮寐の床や氷るらむ、  
源經信

あぢむら

あぢむらぎと滋賀の辛崎。

一一 源平の三烈士

所從の士

渡邊競は源三位入道頼政が所從の士には、第一のものなり。然るに治承年中、頼政高倉宮をすゝめて兵を起しし時、京師を發し倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘れてやありけん、競にかくと知らせざりし程に、競しはらく猶豫して家にありけり。平宗盛日ごろ競が魁偉なるを見て、己が所從にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に残りしとき、六波羅に參れと人していはせければ、參りけり。宗盛對面して、汝今よりに我につかへば、入道の恩にはまさるべし。とて、小糟毛とい

魁偉  
せまほし

小糟毛



貝鞍  
料  
胄  
たぶ  
ほくそそみ

ふ馬に貝鞍おき、乗りかへの料とて、遠山といふ馬を引きそへ、黒絲緘の鎧胄まで皆具してたびけり。競かしこまり賜はりて、ほくそそみしてまかり歸りぬ。一族家人打寄りて、「入道殿是程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取残されしは眞實に遺憾なり。大將のきみ、うちかたらひ給ふはいなみ難し。時の花をかざしにせよ。」といふ事もあれば、唯このまゝにてあれかし。」といふを、競いやとよ、勇士の義さはあらず。」とて、宗盛より賜ひける鎧着て、小槽毛に乗り、郎等七騎打連れて、三井寺へとて打出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬に乗りながら門のうちへ高聲に言ひいれけるは、「競こそ只今賜はりし馬に乗り、三井寺へ罷越し候へ。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、此度死を共に致す

眷顧

通問  
疎意

にて候。御門前を空しく打過ぎんは本意なく候へば、御いとまを申し候。」とて、三井寺に至り、頼政と一緒になりしが、其の後宇治橋の合戦に、いきぎよく討死してけり。彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母老尼、清盛に乞うて死を救ひけり。其の時宗清、頼朝を朝夕に勞りしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせける程に、頼盛獨り一門に叛きて、都にとどまりけり。其の後平家未だ亡びずして、西海にありし時、頼朝舊恩を謝せんが爲に、頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべきよしをいひおこされけり。頼盛關東に赴くとて、宗清に、「いざつれて下らん。」といひしに、宗清いひけるは、「頼朝某に下

朋友

安堵

いたはる

流謫

れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候。今更源氏に詔ひて其の蔭により候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜しくこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜やすき御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候ひて、頼朝某が事を尋ねられ候はば、折節いたはる事あるよしを、仰せられて給はり候へ。』とて、鎌倉へは行かざりけり。其の後西海へ下りけるにや、其の終をしらず。

伊東祐清は伊東祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫の時、祐親に依つておはせしが、祐親事によりて頼朝を害せんと

勸賞

するを、祐清かなしみ、頼朝をふかく愛護し、ひそかにのがれ去らしむ。其の後頼朝兵を起して、伊豆より相模へ赴きし時、祐親平家のみかたとして、大庭景親等と石橋山に至りて、頼朝を追襲ひけり。其の後頼朝すでに東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕つて至りしを、其の罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召出して勸賞を行はれんとありしに、祐清、ただ御恩には、はやく殺され候へ。父囚れ其の子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし。』といふに、さればとて、我を救ひしものを殺すべきやうなし。』とて、ゆるして放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、其の後篠原の合戦につひに、討死を遂げけり。

此の三人時代も大かた同じく、志節も相似たり。その清風・高義、源平の間に求むるに其の類少く覺ゆ。  
(駿臺雜話)

### 一一一 夏の小金井

茶屋を出て、自分等は、そろ／＼小金井の堤を水上の方へとのぼり始めた。小金井は櫻の名所である。夏の盛に其の堤をのこ／＼歩くは、餘所目には愚に見えるだらう。しかし其は、未だ今の武藏野の夏の日の光を知らないからである。

空は蒸暑い雲が湧きいでて、雲の奥に雲が隠れ、雲と雲との間の底に蒼空が現れ、雲の蒼空に接する處は、銀の色とも雪の色とも譬へ難き純白な透明な、何となく穩かな、淡々しい

劈く  
陰翳  
不羈奔逸

絲遊

喘ぐ

色を帯びて居る。其で蒼空が一段と奥深く青々と見える。そして一種の濁つた色の霞の様な者が、雲と雲との間をかき亂し、雲を劈く光線と、雲より放つ陰翳とが、彼方此方に交又して、不羈奔逸の氣が何處ともなく空中に微動して居る。林といふ林梢といふ梢、草葉の末に至る迄が、光と熱とに溶けて、まどろんで、怠けてうつら／＼として酔うて居る。林の一角、直線に斷たれて、其の間から廣い野が見える。野ら

一面、絲遊が騰つて、永くは見つめて居られない。自分等は流るゝ汗をぬぐひながら、大空を仰いだり、林の奥をのぞいたり、天際のエに接するあたりを眺めたりして、堤の上を喘ぎ／＼辿つてゆく。「苦しいか。」「どうして、身うちには健康がみち溢れて居る。長堤三里の間、ほとんど人影

を見ない。農家の庭先、或は藪の間から、突然犬が現れて、自分等を怪しさうに見て、そしてあくびをして隠れて仕舞ふ。彼方の林では、高く羽ばたきをして、雄鶏が時を告げる、其が米倉の壁や、杉の森や、林や藪に籠つて、ほがらかに聞える。堤の上にも、鶏の群が幾組となく、櫻のかけなどに遊んで居る。水上を遠く眺めると、一直線に流れてゐる水の末は、銀粉を撒いたやうな一種の陰影のうちに消え、間近になると、つれて、きら／＼輝いて矢の如く走つてくる。自分等は或橋の上に立つて、流の上と流の末とを見比べて居た。光線の具合で、流の趣が絶えず變化して居る。水上が突然薄暗くなるを見ると、雲の影が流と共に、瞬く間に走つて来て、自分等の上迄来て、ふと止つて、急に横にそれて仕舞ふ事がある。

粘土質  
揉む

る。暫くすると水上がまばゆく煌いて来て、兩側の林、堤上の櫻、あたかも雨後の春草のやうに、鮮かに緑の光を放つて来る。橋の下では何とも言ひやうのない優しい水音がする。これは水が兩岸に激して發するのでもなく、又淺瀬のやうな音でもない。たつぷりと水量があつて、それで粘土質の殆ど壁を塗つた様な深い溝を流れるので、水と水とでもつれてからまつて、揉合うて、自ら音を發するのである。何たる人なつかしい音だらう。自分は、此の流に沿うて散點する農家の者を、幸福の人々と思つた。  
(國木田獨歩)

一三 地震

我はじめ湯島に住みし比、癸未の年十一月廿二日の夜半過

道服

ぐる程に、地夥しく震ひぬ。目さめぬれば、腰の物どもとりて起出づるに、此處彼處の戸障子皆倒れぬ。妻子共の臥したる處に行きて見るに、皆々起出でたり。屋の後の方は高き岸に近ければ、みなく引きくして東の大庭に出づ。「地裂くる事もこそあれ」とて、倒れし戸ども出し竝へて、其の上に居らしめ、やがて新しき衣に更め、裏うちたる上下の上回道服きて、「我は殿に參るぞ。召俱の者二三人ばかり來れ。其の餘は家に留れ。」と言ひて馳出づ。道にて息きるゝ事もあらんと思ひしかば、家は小舟の大きな浪に動くが如くなるうちに入りて、薬器尋ね出して、傍に置きつゝ、衣更め着るほどに、かの薬の事をば、打忘れて馳出でしこそ恥づかしき事に覺ゆれ。

涌く



かくて馳する程に、神田明神の東門の下に及びし比に、地又夥しく震ふ。こゝらの商人の家は、皆々打明けて、多くの人の小路に集り居りしが、家の内に燈の見えしかば、「火こそ出づべけれ。燈打消すべきものを」といひつゝ、走りてゆく。昌平橋の此方にて、景衡の我が方に走り來るに行遇ひて、後の事よきに計らひ給へ。」と言棄てて行く。橋を渡り南に行き西に折れて、又南せんとする處に、馬を立てて在る者を月の光に視れば、藤枝若狹守なり。これは、地の裂けて水の涌出づれば、其の深さ廣さの測り難さに、かくて

超ゆ

帛  
飜る

在りしなるべし。「續けや者ども。」と言ひて、一丈餘りになつて流るゝ水の上を跳超えしに、供なる者共同じく超えぬ。その水超えし時、足を濕しければ、草履の重くなりて、行き難かりしかば、更めはきて馳する程に、神田橋の此方に至りぬれば、地又夥しく震ふ。多くの箸を折る如く、又蚊の集り鳴く如くなる音の聞ゆるは、家々の倒れて、人の叫ぶ聲なるべし。石垣の石走り、土崩れ、塵起りて空を蔽ふ。かくては橋も落ちぬと思ひしに、橋と臺との間三四尺許崩れしかば、跳り超えて門に入りしに、家々の腰板の離れて大路に横たはれるが、長き帛の風に飜るが如し。龍の口に至りて、遙に望みしに、藩邸に火起れり。その光の高からぬは、殿屋倒れて、火出でしやと、いと覺束なくて、心は

先に走れど、足は唯一處に在るやうに覺ゆ。此處より四五町が程行きしと思ふ比に、馬の足音の後の方にするを顧みれば、藤枝の馳來るなり。我此處までは來たれど、ゆく末の事測り難ければ、若狹守殿とこそ見まゐらすれ。あの火の有様覺束なく侍るものかな。」と言ひしかば、「されば候。來らせ給へ。馬上に候、御免かうぶらむ。」と言ひて馳行く。聽て日比谷の門に至るに、番屋倒れ、壓されたる者の苦しげなる聲す。彼處に又馬より下り立ちて居し者を見るに、藤枝なり。これは樓門の瓦の南北の檐より地に落ちかさなりて、山の如くになりたれば、越え難きに因れるなり。「いざたゝせ給へ。」と言ひて、伴なひてその上を越え過ぎて、小門を出でて見れば、藩邸の北に在る長屋の倒れて、火出でしに

遠侍

掖門

て、殿屋には遙に隔りたれば、胸開けし心地す。藩邸の西の大門開けて、遠侍の倒れし見ゆ。藤枝此處より入らむとす。「某は常に西の掖門より参りぬれば、彼處より入り候はむ」といひて別れぬ。

納戸

かくて掖門より入りて見るに、家々皆倒れ傾きたれば、出でたちてある人に路塞がりて行くべからず。其處を過ぎて、常に参る處に至れば、其處も倒れて入るべからず。藤枝又其のほとりに佇み居しを伴なひて、御納戸の口より入りたり。

一四 地震 二

祇候

此處彼處の天井落ちかゝりし處を過ぎて、我は常に祇候す

推參

庇

熾

る處に参りしに、今の越前守詮房朝臣の、此方に來るに行遇ひて、御恙もあらせ給はぬ事を聞き、かゝる時に候へば推參し候。」と言棄てて、常の御座所にまゐるに、その庇の内に、東の屋の倒れかゝりしあり。近習の人々は、南の庭上に立ち居たり。「上には彼方の庭に在しますなり。」といふ。戸田・小出・井上などのおとなたちも此處に入來り、庭上に立ちぬれば、五十嵐といふ人にいひ語らひて、御庇に敷かれし疊十疊許庭上に下して、皆々を其の上に座せしむ。地震ふ事頻りなれば、座せし後の池の岸崩れくへて、平かなる地も狭くなれり。かゝりし程に、酒井左衛門尉眞忠、仰をかうぶれり。」とて入來りて火をふせく。「火熾ならむには、御座を移さるべし。」など聞ゆるに、御袴ばかりに御道服めされて、常の御座の南

面に、出立たせ給ひ、某が侍ふを御覽じて召す。御縁に参りしかば、地震の事備さに問はせ給ひて後に、奥に入らせ給ひぬ。夜も明けぬべき比に至りて、「おほやけに参り給はむ」と聞ゆ。某長門守の耳につきて、「地震ふ事尙頻りなり。参らせ給はむ事いかにや」と言ひしに、吾もさこそは思へど、止め申すべき事に非ず」といふ程に、出立たせ給ひたり。

竭く

かくて、かの火出でし處に行きて見るに、倒れし家に壓され死せし者共を引出したるが、此處彼處にあり。井泉悉く竭きて水無ければ、火消すべきやうもあらず。かゝりし程に、今の隠岐守藤原詮衡の我を誘ひて、兄の詮房朝臣の家の庭に入りて膳を薦む。よべ侍醫の坂本といへる人、庭上に來りて我を引退けて、袖より物出して與ふ。湯に浸したる飯

薦む

市正

を茶碗に盛りしなりき。それを食ひし後程經しかば、飯打食ひ酒打飲み出づ。今の市正藤正直の家の前を過ぐるに、呼入れて茶を與へたり。

宿老

渡殿

かくせし程に、「歸らせ給ふ」と聞きて、入らせ給ふべき處に向ひて迎へまゐらす。そとより、宿老たちと我と四人打連れて、何處にやありけむ、ほそき渡殿のある處を経て、常の御座の方に行くに、作り合はせの處に至る。人々は草履を袖にしたれど、戸田はその用意なしと見ゆ。我はかゝる事もこそあれと思ひて、はじめ庭上に在りし時、そこらの草履を左右の袖にしたれば、取出でて與ふ。斯かりし程に、再び先の處に出でさせ給ひ、某を召して、「我幼き時に、上野にて花見の者共の群れ居るを見しに似つるかな」と仰せられて笑は



別業

せ給ひぬ。兎角する程に火も打消えぬ。日すでに午の半ばにもなりぬべき比、又出でさせ給ひて、某を召す。「妻子どもの事、其の後の事聞えしにや。」と仰あり。「よへ参りしより此處にのみ侍ひて、それらの事も承らず。」と申す。「我谷中の別業に行く時に、人の教へたりしを思ふに、居處は高き岸の下に在りしところおぼゆれ。」と仰せらる。「さん候。」と申す。「いよゝゝ覺束なき事之。かくては、地震ふ事數日をも経む。震ひし初の事の如くならむには、相構へて來るべからず。疾くゝ家に歸るべし。」と仰せ下されしかば、罷出づ。召俱の者に尋ね逢ひて、「よへの儘に侍ひしにや。」と問ふに、「今朝とく家に殘しし者どもの來り代りぬれば、家に歸りて、物食ひて又参れり。」といふ。これによりて、妻子

どもの恙なかりし事を知りぬ。心靜かに家に歸りぬれば、未の初には過ぎぬ。  
(新井白石)

一五 夏の夜

鈴

雲母  
填む  
潤

何時の間にか月は高くなつて居る。水飴色に輝いて、高く高く澄みわたつた空には、砂子のやうに煌き零れてゐた宵の内の無数の星も、今は大粒なのを殘して、大方は見えなくなつた。湖水は、一面の雲母を張填めたやうにうつとりと潤みをもつて、有るか無きかの小波に碎ける月の光が縦にちら／＼と長く延き、薄墨繪のやうな堤の小松の林を越えて、しとどに露を帯びた青田の上を渡つて、其處の井戸傍の水溜りに影の末を浸してゐる。湖水の向うの山畠の裾に、

歎む

萌葱

瓦焼く焰がぼうと肉色に立登つてゐるほかには、水も陸も  
一様の銀鼠色で、天地はさながら白玉の内に凝結したやう  
に、飽くまでも清く、飽くまでも涼しく、飽くまでも静かな間  
を、折節月夜鳥の鳴いて行く、其の羽影も明らかに認められ  
た。何處やらで粉麥を挽く白の音が、蛙の聲に交つてきこ  
えて来る。

月は登り切つて、何時の間にか挽白の音も歇んで、夜は大分  
更けたやうである。

風に流れて、ふわ／＼と庇の内へ螢が飛んで来て、そつと蚊  
帳にとまつた。萌葱の布目を透いて、麥門冬の実よりも青  
い光が、優しい呼吸をしてゐるやうに見えたが、やがてさら  
さらと青田の戦々音に驚いて、ついと蚊帳を離れたかと思

簷

蛭

臉 映く  
呻く 慵

闕 匍ふ

ふと、忽ち簷外の月の光に包まれて消えて仕舞つて、微かに  
稻の香が枕頭に通うて来る。

露を含んだ涼しい風は、絶えずそよ／＼と吹送られて、蚊帳  
の周囲が蛭を作つて波立つ度に、庇の外の圓い月の形まで  
が揺ぐやうで、ちやうど水中の影を逆に望むの風情がある。  
庭の隅で澄切つた音をして、蚯蚓が一つ鳴き出した。それ  
が耳に沁みて、目は彌、沍えるのであつたが、それも慣れて臉  
を映くと、此度は夢を咬いてゐるやうな慵い蛙の聲が、睡氣  
を促す。

水の如き影は、次第に蚊帳をば登つて闕を出て暫く縁を匍  
つてゐたが、遂に庭に落ちて仕舞つて、家の内は暗くなつた。  
月は餘程低くなつたらしい。堤の小松は早かつきりと黒

遮る

桔槔

黯淡  
凄寥

褪す

眞菰

蒼

くなつて、湖水の鏡も稍曇つて來たが、廣々と刈揃へたやうに一物の遮る蔭も無い一面の稻田は、未だ宵のまゝの眞白な光を延べてゐるので、此の背景の明るいだけ、庭前の立白や桔槔や、土塊や、草葉の、傾く月影に濃い陰影を置いたのが際立つて、黯淡たる夜更けの氣勢は、漫に冥の凄寥を聯想せしめて、冷々と肌に沁む氣は秋のやう。退潮は六刻半であるから、短夜のもう明けるに間も無い。今迄うす淋しげに叩いてゐた水鶏が、ぱつたり歇むと、鶏の聲がする。月の光の褪せ行くに連れて、田面は薄い霧靄が立罩めて、向うの松も水も臙に煙る様である。夜の色は井筒の傍の水溜りから先づ放れ初めて、其處の短い眞菰の間から、河骨の黄色な蒼交りに、藻の花の白く咲いてゐるのが、さながら粉米を撒

いたやうに見える。遠くの森で不意に鳥の鳴くのを聞いて、ふと東を望むと、はや、曉の色が白々と動いてゐた。

(小栗風葉)

### 一六 夏の曙

蚊帳 釣草 や 釣鐘草 や 菰 酸漿 などの 亂次

勤行

將棋

蚊帳釣草や、釣鐘草や、菰、酸漿などの亂次に浴びた露の間を分けて、脊戸の野菜畠へ出ると、此處からは村一圓の布置が水田を隔てて一目である。丁度勤行の木魚を叩き出した尼寺の瓦家根と、常夜燈の光の細々と残つてゐる鎮守の森とを兩袖にして、將棋の駒を散らしたやうな茅葺の疎な家並は、何れも猶朝霧の中に靜かに眠つてゐる。東雲の天は稍紫立つて來た。草の中で絶え絶えに、咽ぶや

紺青  
茄子  
雌黃

うな細い地蟲の聲がして、翅の濡れた青い羽蟲が、重さうに裾へ飛着く、畑には紺青の滴るやうな茄子や、雌黃で刷いたやうな胡瓜や、さては紫蘇だの、唐辛だの、小角豆だのと、夏端の野菜物は、大抵作られてある。

合歡木

畠の隅の合歡木の根元に、夕顔の棚が架けわたしてあつて、其の星のやうな雫の玉を綴つた廣葉を掩ひ交して、昨夜の花の萎れもせず、ぎつしりと綿のやうに附いてゐる後には、水銀のやうな美しい小川が流れてゐる。小川の岸には、瑠璃色の月草がひしと咲いてゐる。流の向うは見わたす限りの稻田、何萬石の露に濡葉の、さら／＼と風に身顫する共擦の音は、天の恵を囁くやうである。彼方此方に蛙が寢惚けた聲で低く鳴いては、直に又黙つて仕舞ふ。

萎る

笹縁  
朽木形

暈

鳩羽色にレモン色の笹縁を取つた朽木形の横雲が、地平線の上に棚曳いた蔭から、ぼつかりと赤く射映えた光線が、末廣がりに暈ぼされて、空は澤の無いミルク色に明けた。先刻まで消えさうな光を辛くも保つてゐた明星も、終に失せて仕舞つた。西の際は未だ一帶に素鼠色を隈取られて、村の後の光琳風の禿山に、入方の月が夢よりも淡く残つてゐるのを見捨てて、我先にと光明の方を望んで、勇ましく鳥が鳴きわたる。

光琳風

蟬

萬象

朝餉

雀が囁り出して、續いて合歡木の梢に元氣の好い蟬の聲やがて燃ゆるが如き眞紅の旭は、ばつと東に登つて、萬象は一時黄金色に輝く。山も、水も、野も、星も、今は同じ光に明放れて、遠近に朝餉の煙

が寛く立登りながら、桔槔の音や、小兒の聲や、犬や、鶏や、一緒に相交つて、さもく豊かさうに村の平和を語つてゐる。

(小栗風葉)

### 一七 執着心

執着は自己の心を頑固にす。比較といふことを忘れて、好悪美醜の判定を誤らしむるのみならず、好悪美醜に就いて思考するの暇をさへ胸中に有せざらしむるに至る。是皆執着のために虚靈の心、偏僻となるが故なり。故に執着は好きことにあらず、賢きわざに非ず。

昔釋迦佛は執着を破し給へり。蓋し、執着する事の悲しむべく傷むべきものなることを知り給へばなり。然らば釋

執着  
比較

偏僻

釋迦佛

妄感

覆載

螢光

迦は執着し給ふところ無かりしかと云ふに、我が思ふところにては決して然らず。唯釋迦の執着の如きは、自ら他人の執着と異なりて、他の如く偏小ならず、他の如く固陋ならず、妄感に基づきし執着ならず、井蛙の海を見ずして自ら得たりとするが如き執着に非ず、強く感じ、深く考へ、堅く信じたる後に之を有するに至れるものなり。其の執着の大なるや、譬へば、我を覆載する天地の大にして、我自ら其の以外に脱出し得ざるが如きものなり。

斯かる大執着心は、日月の光の如し。此の大執着心を抱く者より、彼の小執着心を抱きて、區々の妄感、妄想を戦はす者を見れば、燈火の如く、螢光の如し。ただ其の憐むべき無益の争をなしつゝ、相競うて其の光輝を揚げんとする間に、油

宏圖

孔子

端嚴

盡き秋至るの時來るを見るのみならん。大執着心は大業を成し、宏圖を成し、美德を生じ、平和を來す。華盛頓の傳を讀めば、我は正に彼の滿身に公明、勇剛の大執着心ありしを知る。孔子の書を讀めば、我は正に仲尼の滿身に端嚴、清潔の大執着心ありしを知る。古今の敬重、愛慕すべき豪傑、君子、誰か此の大執着心の中に住せざりし。蓋し、此等の君子、豪傑は、狭小、偏僻なる小執着心を有せずして、公明正大の大執着心を有せしなり。小執着心を有せずして大執着心を有するは、良きことなり、貴むべきことなり。

(幸田露伴)

### 一八 我が住家

一字

椿、楓

無花果

百日紅

簇生す

環堵蕭然

みづから世を避けて門を鎖すとはあらねど、片田舎に住めば來り訪ふ者おのづから稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街をはなれて一字の茅屋立てり。屋外凡そ千坪前に葡萄棚あり。後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、其の間に簇生す。四顧ただ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。

穉兒

われ年來病軀をいだけり。我が志を伸ばさんには、先づ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず。嘗に我が心に適するのみならず、亦我が體に適す。汽車の便をかりて、都門よりかへり來れば、滿園の綠樹、笑つて我を迎ふ。穉兒飛來りてわが手の

團欒

布呂敷包に取継る。例として土産の菓子あらんことを期するなり。さるにても、わが志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ愧づかしけれ。蒸暑き夏の夕、涼臺を無花果樹下に移して、一家晚餐に團欒すれば、竹葉そよぎて涼氣自ら盤上に迸る。ひと鉢の飯、母とわかち、妻子と分ち、庭の鶏と分ち、池の鯉とわかたなり。今ひとつ一匹の犬、いつも食時を違へず來りてかしまる。これ近隣の家の飼へるものなり。その主人、近ごろ妻子を殘して病死せり。喪家の狗の警思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴をなげ與ふるを常とすれど、貧家の厨、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、唯鼻先にかきたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

喪家の狗

厨

一泓

一泓の池水二間四方に足らざるばかりなれど、清水わきて流れ出でて田にそゞぐ。もとは、朽木中に満ちて、蛙やゐもりの棲處となり、岸には雜草生ひしげりて見るかげもなかりしが、草を芟り、朽木をとりのけ、ゐもりを捕へ出すこと七八十に及び、水はじめて澄みて鑑むべくなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙ゐもりのみと思の外、長さ一尺ばかりの黒鯉ありて遊びめぐり、人の足音きゝて穴ふかくひそみゆく。大兒と中兒と之を見て興がり、今少し鯉を入れよといふまに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黒や、碧水に一種の模様を畫き、或は集り或は散じ、時には水面に唼喝し、時には空に躍る。形ばかりの欄干ある獨木橋上に立ちて之をながめ、之に餌をや

芟る

遊ぶ

緋

唼喝

獨木橋

食る 嘴

ること、三兒にとりてはこの上もなきなぐさみなり。  
 おぼつかなげに、ととくと呼びて、鶏に餌を與ふること、  
 亦小兒がなぐさみの一つなり。家の四方に散在せる鶏、こ  
 の聲を聞きて喜んで來り集り、先を争うて食ふ。雄三羽、雌  
 七羽ばかりあり。種類も一ならず。就中しやもの雌一羽、  
 最も慄悍なり。餌を食ること最も甚しく、近よるものの頭  
 を嘴にてつゝくさま、如何にもにくらしく、他の鶏恐れて敢  
 へて近よらず。されど、最も大にして好き卵を生むものは、  
 このしやもなり。  
 園中、兒を喜ばしむるものは、梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗  
 なり、無花果なり、筍なり、鶏なり、鯉なり、蟬なり、とんぼなり。  
 此等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見ればただうれしきな

筍

朶 愁雲  
 古稀 苦楚  
 小春日和  
 小康

り。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、  
 はじめはその愛すべきを覺ゆ。終にその敬すべきを覺ゆ。  
 自然の奥には、何等かの神異物ひそめるが如く思はる。而  
 して、小兒は人類の中にて、最も自然に近きものなり。よし  
 や子を持つて、未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら  
 知らるべくや。  
 たのしき我が團欒にも、なほ一朶の愁雲たなびく。そは我  
 が胃腸の病なり。母や齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數  
 十年を送りて、我と相住むことも、前後僅々十餘年に過ぎず。  
 末年、われと相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日  
 和の如きか。然るにわが病弱の身は、その小春日和をさへ、  
 時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣



健啖

遣ひ、わが食少きを心配す。親を思ふ心にまさる親心と詠  
じけん。世に、子の病ばかり親の心をいたましむるものな  
し。罪ふかき哉。抑、不孝の子なる哉。昔は廉<sup>\*</sup>頗老いてな  
ほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名  
故、われは親故に、強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さ  
へ、ものするに至りぬ。食すゝむやうになりて、うれしとて、  
母の喜ぶさま見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度  
ぞや。

(大町桂月)

一九 簡易生活

大椿といふ人が豆をかちつて苦學したとは、余等が子供の  
時に小學讀本で讀んだ話である。修業の間は弊衣麤食に

箴言

甘んじて、玄關番となつても苦學するといふのが、我が學生  
の美風である。佛教徒の修業にも、粗衣麤食を方便として  
ゐる。「菜根を咬み得て百事成すべし」といふ事が古來の箴  
言である。この衣食住に簡易であるといふことが、總じて  
日本人の古からの美風ではあるまいか。  
上代の衣服は、概して白いもので、何等の裝飾も無かつた。  
曲玉の様な珠をかけた事は物に見えてゐるが、これとても  
今日から見れば麤末なもので、しかもそれは高貴の人に限  
られたらしい。文明の發達しない野蠻人でも、裝飾を好む國  
民は、鳥の羽を附けたり、獸の毛を附けたり、貝を飾つたりす  
るが、日本には其の風が無い。  
文明の進むに従つて、種々の贅澤の起るのは自然の事で、奈

風雅

良・平安時代と段々生活の程度は進んで來た。平安時代になつては驕奢に流れたといはれるが、併しそれとても大したことではない。藤原氏など上流社會のものが、奢侈に流れたに過ぎない。殊に朝廷が驕奢をなさつて、下民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つもない。皇室は禮儀道徳・風雅等の淵源であつたと共に、儉約の徳に於てもやはり模範となられたのである。

鎌倉幕府の政は、全く勤儉で押通した。何事も質素簡易を旨とするのが、幕府施政の方針であつた。それ故、鎌倉時代の逸話には儉徳の美談が多い。中にも北條時頼が時の執權でありながら、或夜味噲を戸棚から尋ね出して酒を飲んだ事や、其の母の松下禪尼が明障子の切張をした事や、時頼

逸話

味噲

砥

の用ひたといふ青砥藤綱といふ人の滑川の話などは、よくこの時代精神を示して居る。ただ徒に儉約をするのではない、平素は粗衣・麤食に甘んじて、一旦事あらん日の準備に貯蓄をするのが、武家を通じての教訓である。足利時代の武家の家法・家憲ともいふべきものは、いづれも儉素を條文に立てて居る。武士は何時戰場に立つても知れないから、平素麤食・弊衣に甘んずるといふでなければ、生命を鴻毛に比することは出來ないからである。

家憲

鴻毛

足利將軍の驕奢といつても、何程の事でもなかつた。金閣寺・銀閣寺を見ても大抵は察せられる。總じて世間の富貴や驕奢に近づくことは、寧ろ下品な所行として擯斥する氣風が、此の時代を支配して居た。即ち高尚といひ風流とい

擯斥

俳諧  
澹泊  
抹茶

ひ、風雅といふものは、富貴に遠ざかつた簡易な生活の中に在るとの思想が、流行してゐたのである。近世に至りて、流行した俳諧の如きも、澹泊洒落、慾望に遠ざかるを其の道の眞意とした。故に閑寂質朴な家に住み、一椀の抹茶に一幅の掛物、投挿の一輪の花に生活の眞味を求め、物の多くを望まず、富の眼を眩するを好まず、貧しく乏しきを以て安んずる。かういふ澹泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳家者流といひ、世棄人に似て、實は世間に立交つて、其の榮華に心を惑はされなれないといふ境域に達した人である。心を世外に置いて高尙にすることを欲した人で、全く世間を離れて、世事に頓着しないのでは無い。厭世を本義とする佛教も、我が國に來ては現世的なる

國民性に同化せられて、其の簡素を尊び、世事に思ひきりよく、富貴を超越した點の、武士の決斷及び質素に影響した、ことが少くないのである。

余は歐洲に行く時、往には獨逸の汽船に乗り、還には我が郵船會社の船に乗つた。航海の熱さに、獨逸人の水夫はビールやラムネを盛に飲むが、日本の水夫は唯水を飲んで働いて居つた。此の簡易に甘んじて働けばこそ、西洋の船とも競争が出来るのだと其の時感じた。滋養物を食ひ、衛生の事を考へるはよいが、贅澤はするに及ばぬ。日露戦争でも、露西亞の兵隊は茶を飲まなければ戦争は出来ない。將校などは三鞭酒が無ければならぬといふ。英杜戦争の時、英軍の陣營は獵場にでも行つたやうに、贅澤な有様であつた

眞劔

といふ。日本人はそこへ行くといふ眞劔である。例の梅干と握飯で我慢する。軍隊の方では成るべく給養を好くするやうに務めただらうが、兵士の方では贅澤は言はない。これは古來からの勤儉の風が遺つて居るのである。此の祖先の風はいつまでも保存したいものである。併し食ふ物も食はずに儉約するのはもとより儉約ではない。「儉と吝とは似て非なるもの。」とは昔の人も言つた。積極的に働く爲には、體力を養ふ丈の事は必要である。唯分を守るといふ心得で「恭儉已ヲ持シ、成るべく新しい贅澤に遠ざかることが肝要である。」

(日本人による)

## 二〇 日用文

雲るのよ  
そ  
心をやる  
すさび  
慶弔

手紙の文は、雲るのよそに心をやりて、人の世を離れんとにもあらねば、目に見えぬ鬼神を感じしめんすさびにも非ず。年始寒暑の訪れより、月花の折に友を誘ひ、慶弔慰問、乃至は忠告、教誡、唯目のあたりならば、とありかゝりと口にすべきを、筆にいはせて心通はさんまでのわざなり。されば用語のむつかしきを求めず、極めてわき易くすなほなる言葉もて、事の筋明らかに序正しう書きなしたらば、其の外に事なかるべくやあらん。

我が知る某の女子、年たけぬるまで文字書くことを知らず、日々の用事親はらからにも聞えやらん便なく、いとわびしき由に歎きしが、志起して、三十の手習に、いろは唯四十七文字を學びぬ。さて文のこと書きならふに、「ます」をば「候」にか

挨拶

へて、いつしか前文の體も具へつ、いと長き用事をも、一句一句に點打ちつゝ、滯なく書送る。いと珍かに俄なる修業を如何にして斯くは、と問ひしに、唯この口にいふ事をもどとしつ、それに縋りてものせしなり。人、人に逢ふ、必ず言葉あり。寒暑の挨拶、疎遠の詫、これをば文の首に書いて、やがて用事の物語に移る。これより彼、彼よりこれ、口ならば無用の言葉にいたづらの時を過ごすべきなれど、文には紙の限りあれば、用なきことをすべて省きつ、唯いはんと思ふそれ計を書續くるものなり。と言ひき。げにこれこそは手紙の文の本意にて、法といひ、心得といふも、此の外にはあらざるべし。

稽古

春の鶯谷を出でて軒端の梅に聲立て初むる時、おのづからの調、なほとゝのはず。眞の聲は鳴き習ひての後なりけり。初より思のまゝに言出でもし、書出でもせんは、いと難かるべし。常のならひ足らずして、いでさらば文書かんと打向ふ人の、やがて心に筆の従はねば、もどかしう、煩はしう、いはばやと思ひし事も半ば許に書きさしつ、あらぬ雜事せんかたなく交りて、我が心にも、見苦しうかひなきやうにうとまゐるれば、おのづと怠がちになりて、退く心出で來るなるべし。何事も俄にてはあるべからず。日頃心を用ひて、唯こゝもとに湧出づるくさぐさの事どもを、日記といふに書きならひて、口にいふと筆にすると、いさゝかの隔なくなりて、多く世間に交りたる人の、人おちせざるが如く、心安う文書き得

らるべきにやあらん。  
 文は短くして事のわき易きを第一と、人のいふ。本多某が陣中よりの文、いつくも引出されては、世のほめものにとたへらるれど、そは折からによりたるものなり。短くてありぬべき時あり。長きを人の樂しむことあり。遠く離れて逢見ること難く、唯大空をうち眺めては、故郷の人々今いかさまに暮らすらん、野山の様も懐かしく、彼の家、此の家いかならん、里の童、鎮守の森と、さまざま思ひ續くる折、親しかるべき人より文のきたる、いかがは喜ばしからざらん。封をとくももどかしう見るに、暑さ寒さいかに暮し給ふ。此の程こゝにも變りなし。御様承らばや、そのみあらんは、口惜しさ思ふべし。斯かる時の文の上に、こは雜事とて打棄

媼

つべきものなく、一本の草、一頭の犬、媼も、翁も、悉く見る人の慰めになりて、しばし旅寢の憂さをも忘るべし。  
 短くてよかるべきは、近火、負傷の見舞など。凡て不慮の事に人の心あわただしからん折、いと長々と書續けたる、見るもうるさく、なかくの心地ぞすべき。萬に、時といふは必ず見るべきものなり。ついで宜しからぬ事は、何ならねども人の心を痛め、煩を増し、思の外の怒を招く事もあり。人のもとへ物頼にやる文に心つくべく、斷の文は猶更事のさま早く人の心を破りぬべきなれば、そをなだらかに調へてやむを得ぬさま細かにつらね、げにとうなづかるゝやう言はんぞよき。老いたる人に、今様の生さかしき事いひ送ると、其の道の心得なからんあたりへ、我が知れるまゝ歌よみ

生さかし

くれがし

こみてやる、共に無禮なり。言續くれば、何がしくれがしの  
事いと多く、心掛くべき事さまざまあるべけれど、凡て事の  
さまを思ひはかり、文書き出でん時、等閑ならざるやうなさ  
まほしきなり。

(樋口一葉)

一一一 英と佛

國に尙ふ所のものは、能ふだけ政體を變革せず、同一の政體  
を維持し、之を改善するにあり。余嘗て英佛の歴史博物館  
を見て思へり、英國に於ては、古來甚しき政體の變革あらず。  
從ひて今の英人は、古の英人の畫像彫像等に對して、親愛の  
情を感ずること多し。之に反し、佛國に於ては、屢、政體の大  
變革を経たり。故に今の佛人は、古の佛人の畫像彫像等に

冥々

覓に

瑜處

先鞭

對する時、その王黨たり、帝政黨たり、乃至共和黨たるにより  
て愛憎の念を異にす。此の冥々<sup>冥々</sup>に動く心裏の差別は、自ら  
國の統一的及び共同的事業の上に影響するもの尠しとせ  
ず。此の點より觀ても、英國は覓に佛國より幸福なりと謂  
ふ可し。これ英國の現に佛國よりも隆盛なる一因ならず  
やと。

佛國人の瑜處は、宏思を發するに在り、大策を建つるに在り、  
偉業を創むるに在り、發明に富むに在り。此の點に於て佛  
國人は慥に英國人に優れり。英國人の瑜處は、資性の堅忍  
に在り、成功の熱愛に在り、事業の繼續に在り、發明の實用に  
在り。此の點に於て英國人は覓に佛國人に勝れり。試み  
に看よ、殖民政策に先鞭<sup>先鞭</sup>を著けたる者は佛なり。而も其の

地を收めたる者は即ち英なり。印度統治の名策を按じたるは佛なり。而も其の功を奏したるは即ち英なり。汽船を發明したるは佛なり。之を實用に供して、制海權を收めたる者は即ち英なり。文豪・碩學の多き英は佛に如かず。而も文明を致すに於ては佛の後へに落ちず。

一帯水

英・佛兩國、一帯水の海峽を隔てて相對し、相峙して下らず。而も佛國の海軍力は、幾ど英國の一半に過ぎず。若し兩國砲火相見ゆるの日に到らば、佛國は何を頼みて以て英國に當るべきか。是一箇の疑問なり。予の歐洲に在るや、偶兩國の間に事ありて、兩國の海軍各、戰備を戒むるに會せり。此の際兩國海軍軍備の方針を察する事を得たり。英は絶海の孤島なるが上に、其の殖民地は世界の各處に散點し、又

商船の多き、商業の盛なる、列國に其の比を見ず。是皆海軍の保護に待つべきものなり。之に反し、佛は大陸の一國にして、其の殖民地、其の商船、其の商業、皆英に如かず。且其の殖民地には、多く陸軍を備へて之が防備に充つるあり。從ひて其の海軍も亦、英國の如く壯大なるを要せず。故に英國の力を專にする所は海上艦隊に在り。即ち海上の艦隊を強大にし、佛國と開戰するや否や、一舉大洋に敵の艦隊を破碎し、佛をして力屈し、和を請はしむるに在り。之に反し、佛の力を用ふる所は海岸防禦に在り。即ち艦隊を堅固の軍港に集め、務めて海上の戰鬪を避け、敵の艦隊を海岸に引着け、砲臺・水雷艇・潜水艇等と相待ちて、艦隊の最も嫌忌する陸岸との戰鬪を繼續し、英をして戰鬪に疲れしむると共に、



和を講ず  
彌る

經濟に疲れしめ、以て和を講ずるの已むを得ざるに至らしむるに在り。何となれば、英は海上の商工國なれば、戦争久しきに彌れば、海外との通商遏みて物資の供給絶え、工業も中止せらるゝに至る可けれども、佛は大陸の農工國なれば、かゝる虞、英に比して太だ少ければなり。是の故に、英國の海上艦隊は、慥に佛國の海上艦隊よりも優勝なりと雖も、佛國の海岸防禦は、復に英國の海岸防禦よりも完備せり。佛國が一半に過ぎざる海軍力を以て、英國の前に抗立せるものは、此の最後の覺悟あるを以てなり。

(福本日南)

二二 佛になるやう

目利

ある大藩の主に、刃物の目利に長じたるありしが、或時無銘

虞

抗立

肯肉ふ

後生

のふるき刀を見て、「これは相州の正宗なり。」とて、本阿彌に見せられけるに、本阿彌肯はず、「これは志津と見えて候。正宗にてはなく候。」といへば、「いやとよ、正宗なるぞ。汝に預け置くなり。よりく研ぎて見よ。いつにても正宗になりたる時に返し候へ。」とありし程に、心得がたき事に覺えけれども、取りて家に歸りて、しばく研ぎて見るに、志津に似たる刃は見ゆれども、正宗とは見えぬ。かくて年ふる程に、右の主君も失せられしが、二代になりて、本阿彌右の刀を持參して、「御預けの刀果して正宗になりて候。今更、先君御目利のつよさにいづれも驚きて候。」といへば、家老ども其の仔細を問ひけるに、本阿彌「これは不思議に、さる男の後生ばなしにて、正宗になりて候。日頃某が家に心易く出入致す老人あり。」

念誦

常に念誦うちして後生を願ひ候ひしが、ある時來りて『我等此の程は、後生の願ひやうをかへ侍り。只今までの願ひやうこそあしく覺え候へ。このあら凡夫の身として、俄に佛にならんと願へばとて、佛になられ候へきか。佛にならんとならば、まづ善き人にならんと願ふべし。よき人になりて後、佛を願はば、佛になるにたよりあるべし。』と語りしを承りて、是は尤もなることにこそ。彼の刀もすぐに正宗の刃にせんと研ぐ程に、反つて正宗にならざるにてあらん。それよりちかき志津にして見ば、やと存じ候うて、志津の刃を志して研ぎ候へば、やがて正宗に似より候程に、さてこそと存じ、いよく心に入れてときあげ候へば、今は慥に正宗になりて候。』といひしとなり。

(駿臺雜話)

### 二三 平和と人道

先帝御製

よもの海みなはらからとおもふ世に、

などなみかぜのたちさわくらむ。

四海は兄弟なり。大空の下に棲める民等は、人種の如何に關せず、宗教の異同を問はず、皆これ同胞なり。されば、一國に固有なる道德の存するが如く、世界人類間にも、互に相愛し相和し、共同發展をなすべき普遍的道德即ち人道存す。』  
 宇内の諸邦は未だ舊來の陋習を棄てず、動もすれば人種・宗教の異同に重きを置きて、相反目するを免れず。また互に權力を争ひ、武装して纔に國際の關係を保ち、加ふるに屢、兵

反目

同盟  
救恤

十方

嫉妬

火に訴へて血を流すの禍を起すことあり。されど人道は  
 おもむろに進み、昔は戦争・攘奪を目的としたる軍備も、今や  
 一變して内外の平和を保全するを主義とす。既に赤十字  
 同盟ありて、交戦國の病傷者を救恤することは、列國の條規  
 となり、また萬國平和會議は、戦争の災禍を避くるを目的と  
 し、仲裁を以て國と國との争を決せんとするに至れり。  
 我が國民にして、能く東西文明の調和者たる天職を理會し、  
 之を全うするの覺悟を以て進んで力を致さば、列國間の嫉  
 妬、人種間の偏見を去り、國際の關係を親善ならしめ、列國を  
 して武装を解き、互に人道に則りて、文化を進め、富強を競は  
 しむるの日を來さん。我等國民は、日光の雲霧を破りて遍  
 く十方を照らすが如くに、世界平和の指導者たり、人道の擁

理想

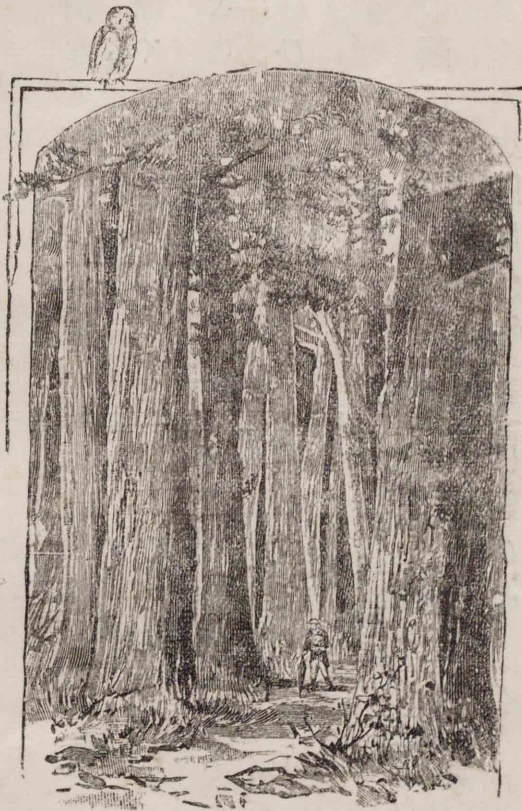
目路

護者たるを以て、至高の理想とせざるべからず。(國民讀本)

### 二四 森

駿河なる富士の麓の大裾野、  
 高原くれば、はろばると目路はひろがり、  
 こゝに今直立すなはちの木の大木の  
 杉のひとむら、眞黒にも神寂び立てり。  
 木の蔭は吹雪に、雨に、炎熱に、  
 旅ゆく人を憇はせて、千尋に延びぬ。  
 この森を要としては、八岐やまたに  
 路の分れぬ、末廣の扇のかたち。

わかみどり、野は春草の色萌えて、  
霞める空に揚雲雀優に歌へり。



甲斐

中をゆく路はおのゝ面白し、  
甲斐へ、武藏へ、相模路へ、都の市へ。

菩提樹  
正覺

こゝにして、今感ずるは、いにしへの  
菩提樹下なる正覺の聖のこゝろ。  
八岐の路の何れも行くによし、  
わが行く方はやがて皆うら安の國。

(與謝野鐵幹)

二五 月四夜

九月十三夜

喜久井町。月が明るい爲であらう、霧に包まれた軒ラムブ  
はぼつちりと明い許だ。同じやうな杉垣の家並を東洋城  
と共に尋ね廻つて、漸く友人の家の裏戸に出る。そこを推  
すと直坐敷の庭で、主人は端近く月光を浴びて居る。

轡(車)

縁に腰かけて雑談。

鐘が鳴る。

いとども啼く、こほろぎも啼く、きりぎりすも啼く、轡虫がやかましい。

月を仰ぐ。影のやうな雲がちらと現れて直消える。

露が深い。木も光つて居る。縁に置いた杖も濡れて居る。

帽子も濕つて居る。

話がと切れて庭を歩く。縁に腰かけて又話す。

露けさの、大空の月となりけり。

東洋城

芭蕉葉を流るゝ露や、月の下。

虚子

寒くなる。障子を締めて内に這入る。

目白臺で又撞く鐘か、後の月。

東洋城

撞く

會式  
題目  
戻る

これで四度鳴つたといふ。

十四夜

本門寺會式。花萬燈を推立て、題目の太鼓を叩き立てて、何結社といふのが群集の中を行きつ戻りつする。月は靜かに大空にかゝつて居る。

萬燈が休む畑の月夜かな。

東洋城

群集に推されゝて池上近くなると、萬燈の數がだんゝ増して、太鼓の音がだんゝ騒がしくなる。石段の下には物賣る店の灯がつかゝと並んで居る。

人を以て埋むる段や、月の下。

虚子

群集にもまれゝ、石段を登り山門をくぐる。燈の數がだんゝに殖えて來る。萬燈の灯許ではない、提灯の火もある。

蠢く

る、篝の火もある。松の間をくぐつて本堂の縁に登る。懸命に題目を唱へて居る一群の男女の顔を照らして、蠟燭が何百本となく燃えて居る。群集はぞろ／＼と其の前を往來して居る。一步を堂内に踏込むと驚いた。埃の雲が渦巻いて居る。頬冠りが蠢いて居る。足の立て處も無いお籠りだ。よく見ると、男もある、女もある。爺様もある、婆様もある。子を負うた新造（新造）もあれば、赤いものの目立つ娘もある。柿をしゃぶつて居る子供もある。一條の血路を開いて須彌壇の前に出る。壇上には一貫目の大蠟が二本、其をとり圍んで大小無數の蠟燭が燃えて居る。其の中に紅白の餅の柱は左右に聳え立つて、紅白の切れで出來た花の枝は天井を壓し、同じく紅白の布をなひませにした善の綱

血路  
須彌壇

天井

開帳

は、空中を横様に、群集の上にわたつて居る。其の紅白づくめの奥は、蠟燭の光の集合點になつて居て、其處に日蓮の木像が開帳されて居る。其の目深く被つて居る純白の綿帽子の下に、漆の如き兩眼は靜かに我等を見下して居る。其の御顔を見上げて、此にも狂するやうな男女の一群が、太鼓も破れよと題目を唱へて居る。本堂を出ると、假屋／＼に灯し連ねて、何々結社といふのが陣取つて居る。松の間にも萬燈が行く、提灯が来る。一群の人は聲高く題目を唱へて、松の間の闇を縫ひ、奥の院に行く。奥の院は、稍物淋しく、月の光も千年の松の幹に傳うて落ち、其處に又一群の人を點出する。日蓮の墓は大きく、日朗の墓は小さく、線香の火は地上に赤く燃える。

踊る

天に星、地に乞食の夜寒かな。 虚子

境内を歩く。夜が更けて寒さが身に沁みる。

ぼろ三味に踊れど寄らぬ夜寒かな 東洋城

長き夜も來し時よりは人少な 虚子

蒲田道

お會式の灯に離るれば夜寒かな 虚子

露踏めば月明らかに野菊かな

同

大森まで、夜を籠めて歩む。

とある古寺の門前の草原に、五位であらう、大きな寐鳥が立

つ。

雞頭に月明き庭や、百姓家。 東洋城

森を出て又稻廣し、月明り。 虚子

十五夜

山王の森。樓門のほとりに立つて居ると、月は薄雲隠れに杉の梢にかゝる。唯一軒茶店が起きて居る。障子に大きな影法師が映つて、片方明放した處に三人許の人が小さく見える。影法師の一舉一動は明白に見える。向うから二つの人影が來る。茶店の方に行きかけたが、引返して樓門の方に來る。引違へて大きな話聲が近よる。薩摩下駄をごろつかせて、樓門を抜けて段を下りる。茶店はいつの間にか雨戸を締めて居る。もう誰も來る者は無い。樓門の二匹の猿も、頭巾を着て涎掛を掛けて、早寢て居るらしい。

十六夜

東海道。戸塚の衆をさそうて、藤澤迄二里の夜道を歩く、一番二番といふ峠も越え、原宿かけとりといふ間の宿も過ぎて、並木の松にからんだ蔦も明るい月に、今宵は暈のあるのが面白い。

松並木出づれば霧の廣野かな。

虚子

七人がだまれば急に夜寒かな。

東洋城

遊行寺。大きな月の暈が境内の空にかゝつて居る。

本堂も庫裡も銀杏の樹も、靜かに其の暈の下に眠つて居る。彌陀本願の光和かに靜かに、銀杏の梢にかゝつて、地には白露が銀を延べたやうに置かれ、虫の諸聲は金鈴を振るが如くに鳴き競うて居る。

靜かさや、藤澤寺の月の暈。

虚子

庫裡  
銀杏

二更

月の暈、二更の星の低く飛ぶ。

同

明け放つ夜寒の門や、遊行寺。

同

片瀬道。片瀬川を渡ると、月は暈ながら曇つて、蕎麥の花に曉近い霧が流れる。

捨船の中の明るし、月の暈。

東洋城

家近く、夜寒の橋を渡りけり。

虚子

片瀬の宿。或宿を叩き起して、七人がどやくと這入る。暗い土間を抜けて中庭に出る。又月の光を浴びる。暈ながら傾く月や、松の間。

虚子

(高濱虚子)

二六 雪山行



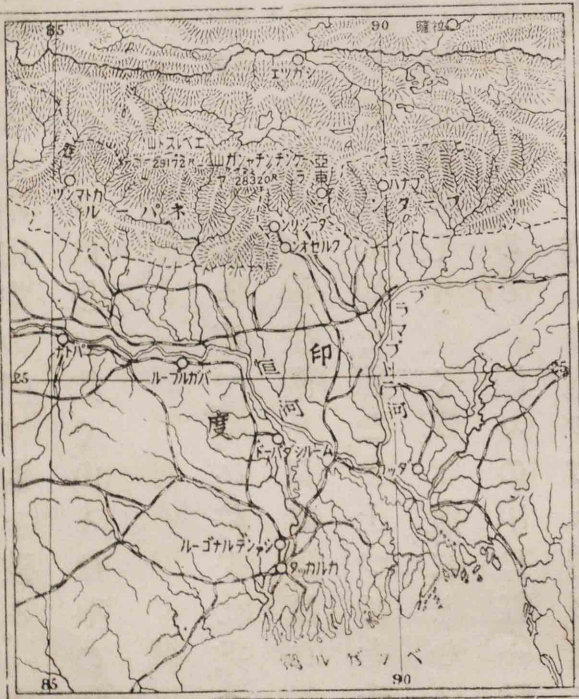
喧擾

河心

翠巒

カルカツタの蒸される様な暑さ、街上の塵、土人の喧擾、その中をぬけ出て北行の汽車に乗つたのは、午後の三時。日は容赦なく車窓にさすが、沿路の椰子、芭蕉の繁み、木蔭の黄花、紅花に風はそよく。恒河の岸で汽車を下りて、渡しの汽船に乗つたのは薄暮。月の光は河心を照らして、水を渡る夕風の涼しい甲板の晚餐には、積日の苦熱も洗ひ去られた。河の渡しとはいへ、一時間もかゝる航行を終へて北岸に着き、尙北行の列車に投じた時は、四方只月光の世界。車中眠覺めて見れば、行く手に當つて、空かと仰ぐ邊に、重疊の翠巒が見える。あゝ、身は已に雪山の麓近くに来たのである。山上りの汽車は、テライの密林を開いた一路を走る。路が漸く上るに従つて茶園が開ける。坂を上り峰を周つて上

白堊  
楊柳



れば樹林は稍疎になつて、見渡す限りの山々谷々に春霞が罩め、崖に臨む白堊の家のある邊には、楊柳の若葉麗しう、桃の花がその間を點綴する。中飯に停車するクルセオンは、早海上五千尺。峰を渡り谷を超えて春風が吹く。上り上つて六千尺の金剛寶土に着けば、日は已に連山の中に沈みはてて、山上の夕風に電燈は蒼く輝き初め、仰ぐ空には白皚々の雪の峰。夕飯

の後に爐に火を焚いて閑談すれば、四方寂寞の中に、燃ゆる薪の音のみ山中の静けさを破る。窓を開けば、崖に沿うた町々の燈火は星の如く、山々は夢の如く淡く横たはつて、大空に月一輪。

空濛

翌朝未明におき出で、荷ひ椅子に乗つて虎丘に向ふ。朝霧面を打つて、四邊空濛。只時々風に従つて開く濛氣の間から脚下萬丈の崖を望む。上つて七千尺の虎丘峰頂に立てば、霧尙深くして、吹く風は肌にしむ。暫くにして東の方が赤く見え初める。濛々の中に紅一點。其も瞬時、忽ち紅の丸となる。雪山の峰つづき霧の海に出る日を俯して見る。濛氣も稍散じ初めた。西藏境の雪の峰も見えようと、北の方をまもり見ても、なかく山らしい物は見えない。あの

斬峰

邊かこの方かと求めつゝ、ふと仰いで見れば、遙か上に霧の海を越えて見える雪の峰。斬峰斷巖手に取る如く、千古の雪は旭光に照らされて輝く。此ぞ二萬九千尺のケンチンジャンガ。求めて居た邊は、云はばその麓で、實の峰は先から高く空中に輝いて見えて居たのである。二日の金剛寶土滞在は、眞に好避暑であつた。名所古蹟を見盡くして、再び雪の峰を背にして名殘惜しうも山を下り、夕暮に恒河の渡しを渡る時、満月は渺々たる河上に上り、古印度詩人の十五滿盛月の詩句を想起した。  
(姉崎正治)

### 二七 獨逸と日本

獨逸は人をしてわが封建時代を想起せしむ。國內に聯立

する者、王國としては普魯西・バイエルン・ザクセン・ウルテンベルヒ、大公國としてはバーデン・ヘッセン等の六國、其の外、公國五、侯國七、自由市三、帝國領一、總じて二十六國にして、各皆複雑なる歴史を有す。今は普國霸權を握りて全國を統轄すと雖も、往時は之と競争せるもの少からず。ザクセンは嘗て之と雌雄を争ひ、バイエルン亦此の二國と好からず。爾餘の諸國も、偏に自國の勢力の伸張に努めぬ。七十年の役に、普國全勝して大勢茲に定まり、普王乃ち獨逸皇帝の位に即く。爾後普國は帝國の統一を計るに專にして、總べての繁華を伯林に集中するの意あれども未だその半ばをだに果す能はず。帝國議會を普に置けば、帝國法院をザクセンに置くの已むを得ざるものあり。是實に皇帝の遺憾と

主治者

する所なり。

普王は獨逸皇帝にして、獨逸皇帝は帝國唯一の主治者たるが故に、苟も帝國人民たるもの、無上の敬意を之に表すべき筈なるに、之を君主と仰ぐこと、普國民の外は厚からず。普の全土、到る處皇帝の寫眞を掲げざる莫く、寫眞店は少きも數十種、多きは數百種を備へ、以て衆客の來り購ふを待つ。然れどもバイエルン若しくはザクセンにありては、概ね自國王の肖像を掲ぐるのみにして、普王は我が與り關せざる所と云ひ顔なり。萬事此の如く、割據の形を成す。但し普國の勢力既に雄強、地と人と以て霸を稱するが故に、他に能く起ちて之を抑へんとするもの無し。加ふるに、普には明君相繼ぎて統を承くるに反し、他の王國には暗君屢、登臨して、

登臨

既墜  
稽ふ

既墜の權勢を回收するに力なく、割據の勢漸次に消失するを見る。然れども仔細に之を稽ふれば、猶未だ然らざるものあり。近年民族統一の觀念漸く高まりたれば、年一年結合を促すならんも、頓にその功を收めんことは能くすべきにあらず。譬へば猶我が徳川幕府時代の如し。徳川氏の八百萬石を控擁して天下を抑制するや、誰とて抵抗を敢へてせざりしと雖も、百萬石の前田氏、七十萬石の島津氏、其の他高祿なる多くの大名、各勢力を維持するに黽め、畫一の極めて困難なるものありき。現皇帝維廉二世は、實に三代將軍家光と謂ふべき所、其の爲人まで相似たるも面白し。獨逸は啻に勢に於て封建の狀を存せるのみならず、社會の情態に於て亦然り。即ち、人は總じて軍人を貴び、男子は軍

控擁す

黽む

爲人

安樂椅子

籍に入ること忌まず。一度軍隊の教育を受くれば、軍紀に慣れし結果として、政府の命令より社交の禮式に至るまで、一一明文に掲げて其の煩を厭はず、馬車の昇降さへも説明を俟つに及ぶ。私人の相對する儀式もまた同じく嚴にして、主客の著座に方あり。客間は、長椅子、安樂椅子を上席とし、順次序を逐ひて輕便の椅子に及ぶ。既に長椅子に導きたる客あるに、更にその上座たるべき人の後れて到るあらんか、直ちに長椅子の客を下席に移し、後れ到りし人を導きて之に座せしむ。或は路に逢ひて帽を脱するにも、亦階級に應じて甲乙あり。日常の事、外國人の見て以て煩に堪へずとするものも、彼等は久しき習慣によりて、何等不快を感ぜず、却つて美風として誇らんとするなり。我が徳川時

雁行

代、大名の三卿に於ける、下土の上土に於ける、町人の下土に於ける、戦々競々として禮の及ばざるを恐れたるに似たり。唯無禮の罪を咎むること我の如く嚴ならざるのみ。獨逸帝國は、各國みな學事に勵み、相競ひて之を隆盛にするに努む。伯林大學は、さすがに帝國第一の地を占むと雖も、他にこれと雁行すべきもの決して少しとせず。バイエルンの<sup>\*</sup>ミュンヘン大學、ザクセンの<sup>\*</sup>ライプチヒ大學は、その名世界に轟くもの、その他の諸國孰も相應の大學を備へざるなく、全國を通じて二十有餘の大學あり。設備を善くし、教授を選びて、學生を迎ふ。大學は互に競争して已まざれども、學生は己が好む所に從ひて、何れに行くも自由に、一の大學より他の大學に移り更に又他の大學に轉ずるを得れば、

轉徙

帷を垂る

一意良教授を求めて轉徙す。我が徳川時代を見るに、國境の警戒頗る嚴にして、各處に關門を設け、他藩人の出入、滯留容易ならざりしが、獨り修學の目的を以てする者のみは、往來甚だ自由なりき。<sup>\*</sup>聖堂は猶今日の伯林大學の如く、各藩には學校の設あり、又碩學、鴻儒の、私に帷を垂れて教授するあり、恰も獨逸各國の大學の如し。獨逸近年の進歩は最も著し。塊を破り佛を摧きて、帝國を一統してより、國運の隆昌、學術産業の發達、世に多く比を見ざる所。殊に機械は眞に長足の進歩をなせりといふべく、序を追ひ順を踏まずして、一躍直ちに幾段を進み、ラムプより電燈に、乗合馬車より電車に變じたるの類、擧げて計へ難し。維新以後に於ける我が國の長足の進歩は、其の分量に

於ては彼に若かずと雖も、其の速度に於ては敢へて劣らざるべし。  
(三宅雄二郎)

仙術

二八 仙術

仙人

食ひのく

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、「松の葉を食ふ人は、五穀を食はずともくるしみなし。能く食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく。」といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好きくふ。誠に食ひおほせたりけん、五穀の類食ひのきて、漸く兩三年になりけるに、實に身も軽くなる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとするなり。」と常にいひて、今々として、内々にて飛習ひなどしけり。既に「飛びてあがりなん。」といひて、坊も何も弟子どもに分ち

同朋

ゆづりて、「我が身には、これより外は入るべきものなし。」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰につけて、既に出でにけり。

弟子・同朋名残惜しみ、悲しび、聞及ぶ人、遠近市の如くに集りて、「仙に登る人見ん。」とてつどひたりけるに、この僧片山のそばにさし出でたる巖の上に登りぬ。一度に空へ登りなると思へども、近く先づ遊びて、事のやう人々に見せ奉らんとて、「かの巖の上より下に生ひしげりける松の枝に居てあそばん。」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上四五丈ばかりありけるを、さかさまに飛ぶ。人々目をすまし、涙をうかべたるに、いかがつらん、心や臆したりけん、かねて思ひしよりも身重く、力うきくとして弱りにければ、飛びはづして

やう  
只死にに死  
ぬ

あるにもあ  
らぬ

谷に落入りぬ。人々あさましく見れども、これほどのことなれば、やうあらん、定めて飛上らんずらんと見る程に、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、我が身も散々に打損じて、只死にに死ぬれば、弟子、眷族さわぎ寄りて、「いかに」と問へば、いらへもせず、僅かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へかき入れつ。こゝに集れる人々、笑ひののしりて歸りけり。  
さてこの僧、あるにもあらぬやうにて痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も恥づかしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては、命生くへくも見えねば、年比いみじく食ひのきつる五穀をもて、さまざまいたはり養へば、命ばかりは生くれども、足、手、腰もうち折りて、起居もえせず。今は松の

葉食ふにも及ばず、元の如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもに譲りたりし坊も寶も取返して、かがまり居たり。仙道にいたる事たやすからぬ事なり。  
(十訓抄)

### 二九 朝鮮の山河

朝鮮に遊ぶもの、歸來其の到る處に禿山、涸川を見る事を説かざるはなし。然れども、これ多くは汽車旅客が列軍の窓よりする皮相の觀察にして、未だ詳しと稱すべからざるものなり。

朝鮮は山の國なり。全面積の約七割は山嶽の占むる所なり。半島を縦貫して其の脊梁骨を成せるは、長白山脈と其の分脈たる太白山脈とにして、朝鮮半島の亂山は、畢竟此の

緩進

長白・太白二大山脈の分脈たるに過ぎざるなり。然して此の脊梁骨たる大山脈の東を裏朝鮮と稱し、西南を表朝鮮と稱す。裏朝鮮は地勢凡て急峻なりと雖も、表朝鮮は地勢綾進にして、平野連亘して河川多し。斯くて朝鮮は獨山の國たるのみならず、到る處河川ならざる無く、三百萬の生靈は山と山との間なる小平野に都邑を設け、溪と溪との間に部落をなし、河畔より河畔に亘りて市街を成せり。

鬼窟

山は、所謂五嶽五鎮を始めとして、名山頗る多く、危峰深峽の勝を以て鳴るもの少からず。懸崖あり、鬼窟あり、飛瀑あり、碧潭ありて、山水の奇を極む。就中白頭山は山の高きを以て鳴り、妙高山は山の深きを以て聞え、金剛山は山の奇なるを以て知らる。而して金剛山は名山中の名山と稱せらる。

梵閣

梵唄松籟

河は、此等の亂山危峰の間を流るゝもの、大小無數なるが、特に鴨綠江・豆滿江・大同江・漢江・洛東江を五大江となす。何れも風景の美を以て稱せられ、白帆・錦鯉・文人・詩客の吟詠に入るもの甚だ多し。

此等の山に倚り、此等の水に臨みて、土俗多く樓亭を築けり。朝鮮の詩文は多く此の裡より出づといふ。又名山の在る所、必ず寺院・梵閣のあるあり。山に倚り、谿に臨みて、獨好風を擅にせり。深山の裡、梵唄の聲、松籟に和し、梵鐘の響、谿音に伴なふを聞くは、眞に趣あり。水は是等の樓亭によりて、興一入深く、山は是等の寺閣によりて、一層美なり。

驢馬

若しそれ、河畔・沼邊に鶴・雁・白鳥・鴨等の水禽の多く住める、野に白衣の人の點々たる、短小なる驢馬の鈴を鳴らして急ぎ、



牽く

牧童の巨大なる牛を牽きて行く、これ等の光景に至りては眞に詩中のものといふべし。唯彼の山に虎豹の出没するは賞すべき限りのものならねど、遙に其の聲を聞くはいと壯烈なり。

惜しい哉、多年上に苛虐誅求の施政者あり、下に逸遊懶惰の人民あり、山は濫伐によりて赭秃となり、河は爲に涸渴に委したり。彼等自然の風致を愛せざるにあらざれども、是を保護するを懶しとし、天成の美景を破壊汚損して顧みざりしもの、獨是を山水の爲に歎く可しとせんや。今や我が皇の威此の土に及び、一千餘萬の生靈我が皇の德澤を被るに至り、山は年々に生色を増し、水利漸く成らんとす。天與の好山河の其の美を復せん日は、やがて此の土の生民が我が皇

苛虐 誅求 懶惰 濫伐 赭秃

化を謳歌せん日なるべし。あゝ其の日豈遠からんや。

### 三〇 鳥居強右衛門

天正二十年五月、武田勝頼三萬七千の兵を率ゐて、奥平定昌の長篠城をとり巻きて攻め立つること愈、急なりければ、城中の者籠中の鳥のごとく、剩へ糧乏しく僅かに十餘日ばかりの儲を餘すのみなり。城中にては、此の事疾く濱松へ注進し後援を乞ふべし。誰かある。此の敵の中を忍び抜け、岡崎に至り加勢の手段をなし得べき。と評定せしに、鳥居強右衛門尉すゝみ出でて、某この御使を勤め候はん、首尾よく寄手の陣を通りおほせなば、向うの峠にて合圖ののろしを上げ申すべし。ただし無事に歸り參らんこと、覺束なく候へ

ば、今生の御暇を申し候。』とて既に立出でんとしけるを、鈴木金七郎、強右衛門尉が袖をひかへ、大事の御使なり。御同伴申さん。一人敵に取籠められたらんとき、一人は走りぬけて御使のむねを出来申すべし。』とぞ望みける。誠に道理なれば、定昌仔細なく是を許さる。鈴木、鳥居大いによるこび、十四日の夜ひそかに城を忍び出で、西の方なる岩根を傳ひ、川邊に下りて水中を潜り行きけるが、かねてより武田方にてこの河底に繩を張り、水上に鳴子をかけ、渡る人あればこの繩にかゝり鳴子のなるやうに構へたりけるを、鳥居鈴木いかで知るべき。窺ひ見れば怪しき繩を引きはへたり。様こそあらめとおもひつれば、刀を抜きて繩を切りつゝ、すみけるに、ふと鳴子の音す。武田の番兵あやしみ、五六人

河邊に集り、いかなれば鳴子の繩の切れしにやと疑ひ思ふ顔色にて、川中を白眼まへて立ちたれば、一人が曰く、今五月の半ばなり、かゝる大川には鱸が上り下るものなり、それが繩をば切りしならん。』と云ふを、強右衛門尉、金七郎其方にはいまだ尾鱗はなかりしものを。』とたはむれながら漸々に川中をくゞり、廣瀬と云ふ處より雁坊峠へよぢ上り、約束の狼煙を上げ、十五日の未明に岡崎へ馳せ着き、家康に對面して城中の様子を悉しく言上しけるところへ、織田殿の先手おひく。馳付けたりしかば、鳥居、鈴木大いに悦び、斯くの如く神速に御出馬候上は、武田勢を破らんに何の難き事か候べき。但し此の事未だ城中には存じ候まじく、何ほどか心痛罷り在り候はんに、一刻も早く告知らせ安堵仕らせたく候。』

と申し切り、金七郎には「残り止り御案内まをすべし」と申し、て鳥居は直ちに引返す。信長も加勢の爲に出陣して、途中に逗留いはれなし。早く戰場へ馳せ向ひ敵を追拂へ」とて岡崎を立たせたまふより、瀧川木下承り候と申しもはてず、我劣らじと先陣に進めば、牛久保まで五里餘の間軍勢ならぬ處もなし。こゝにて夫々の手分して、岐阜勢五萬餘騎長篠指して發向すれば、三州勢も劣らじと打ち立ちたり。強右衛門尉は織田殿に引別れ、片時も早く城に歸り入らんと途を急ぎ、既に長篠の向うなる篠原といふ所まで來り、始の如く川をくぐりて城中へ入らんと、此處彼處を窺ひけるに、武田勢の用心嚴重にして便宜を得ず。如何にして川を渡らんかと猶豫して居たりけるを、江原彌太郎と云ふ者に

あやしまれ、遂に生捕られて勝頼の本陣へ召出さる。勝頼、鳥居に向ひ、城中の兵士何と思ふぞ。落城遠からずと見ゆるに、加勢を請うて何かせん」といへば、鳥居答へて「さん候。二百餘人の勢を以て此の城に籠もり、今日まで持ちこたへ候にて、城中の兵士等が志をば御察しあるべく候。又城中兵糧乏しきを以て、一日も早く後詰の來著せん事を催促のため罷り越して候處、信長の勢五萬餘騎はや岡崎に着陣して候。因つて城中の體を語り候へば、氣早の大將信長の先陣牛久保迄押付けて候。」と申しけるに、勝頼、一條右衛門大夫信龍を招き、御邊の陣に伴なひて斯くくなし給へ」と囁きしかば、信龍心得強右衛門尉を同道し、まづ縛の繩を解き「其方は勇士なり、城中に立歸りなば亂軍の中に討死すべし。

それよりは當陣に虜れしを幸として武田家に忠を竭くすべし。侍は渡り者ぞ。奥平が充て行ふ恩に十倍して召仕はるべき由大將の御下知あり。とすかせば、鳥居も心得てかく生捕となる上は一命をめさるべき筈の處、召仕はれんとの御意、まことに以て忝し、下郎ながら相應の稼ぎ仕るべく候。と申すに信龍大いに悦び、人は上下の區別なし。心計りを大事とす。その辭に相違なくば、某が申し付くる事あり、それをだに勤めおほせば、はや其方の大功は立ちしといふものなり。恩賞又忽ちに行はるべし。とあるにより、強右衛門尉、仰せの趣かしこまりて候。身に應じ働き申すべく候。と答へしかば、さのみ骨の折るゝ事もあらじ。その方を城の大手へ連れ行くべければ、城中の傍輩を呼出し、我岡崎に

至りて加勢のことを言上せしかども、岐阜にては石山門徒越前門徒と合戦いとまなく、加勢のこと思ひも寄らずとのことなり。城中にも覺悟あるべし。所詮後援のたのみなし。と申すべし。夫にて其方の大功一時に立ちしといふものぞ。と諭しければ、何より以て易き御事、仰せの如く勤め申すべし。と答ふるにより、信龍も悦喜の體にて、城中に立歸り、今日中に死すべき者が命助かるのみならず、本領十倍の加恩を得ること、大將の眼力とは云ひながら、世に多からぬ果報者かな。と稱美しつゝ、約の如く早く行ふべし。といそがれて強右衛門尉大手の前に至り、城中のかたがたに申すべき事ありて鳥居が參り候。と大音に呼ばはれば、門の上なる櫓に定昌立ちあらはれ、いかに鳥居が敵に捕はれつるぞ。と歎

く。鳥居うち笑ひ「大事の御使に出でし身なり。そのことを告げ申さん爲に参りて候。『織田殿自國の軍に暇なく加勢の事思ひも寄らずと申せ。』と敵方の大將たち某に教へて候が、實は信長五萬餘騎を率て昨日岡崎につき給ひ、某も見参して候。先陣既に牛久保に着きたまへば、それぞれ手配あるとも、後援の到着三日を過ぎ申さず。それまで堅固に守らせ給ふべし。」といひも敢へず、武田の兵士大いに怒りて、「悪き奴の振舞かな。」とて一條が陣にひき立てゆく。一條の本陣へ連れ行き有りのまゝを語りけるに、馬場・山縣、いしくも言ひつるよな。奥平が家には好き士を持ちけるかな。誰々もかくこそありたけれ。赦して歸さば武田の家の面目ともなるべきに。」と諫めしかども、勝頼さらに聞入れず、悪

さもにくし、城中の者によく見せて殺せや。」とて、長篠の城の向ひなる有海の原の篠原につれゆきて礮にかけられたり。

(大閤記)

増補 大正讀本 卷五終

註釋 (卷五)

生死の年は我が國の人には年號を用ひ、西洋人には耶蘇紀元を用ひ、支那人は國の名を記して生死の年を示さず。

- 伊東祐親 伊豆の河津庄を領するを以て河津二郎とも稱す。工藤祐家の子、源頼朝の伊豆に流されし時身を寄せし人。
- ウルテンベルヒ (Wurtemberg) 獨逸聯邦の一王國、バイエルンの西に位す。
- オリンピア (Olympia) 希臘ペロホンネサス半島の西北エリス州に在り。
- 景衡 朝倉與一と云ふ。
- 喜久井町 東京市牛込區内にある町の名。
- グラッドストーン (William Ewart Gladstone) 英國の大政治家 (一八〇九—一八九八)
- 源三位入道頼政 白河院の知遇をうけ後後白河天皇に仕へて王事に勤む。治承年中以仁王を奉じて平家を亡さんと計り、事漏れて清盛に討たれ、宇治に自殺す。
- 孔子 支那の聖人、名は丘、字は仲尼、春秋戰國

時代の魯の人。

- 光琳風 尾形光琳といふ畫家の始めたる妖豔なる畫風を光琳風と云ふ、光琳は元祿・寶永頃世に居たる人なり。
- ザクゼン (Zakzen) 獨逸聯邦の一王國、中央獨逸にあり。
- 志津 刀鍛冶兼氏。正宗の弟子、延慶正中年間の人。
- 山王の森 東京市麴町區に在る日枝神社の森。
- シラキユース (Syracuse) シ、リ、島、東南岸の都市。
- ゼウス神 (Zeus) 希臘神話中の神。諸神の主宰者にして、森羅萬象を支配す。
- 聖堂 大成殿と云ふ。孔子を祀れる廟。初江戸忍岡に在りしを元祿年中、綱吉之を湯島の地に移す。今なほ存す。
- ソールズベリ (Salisbury) 英國の政治家 (一八三〇—一九〇三)
- 平頼盛 忠盛の男、池大納言と號す。平家亡びて後、頼朝尾張國を與へ、子孫相つぐ。
- 忠度都落 忠度は平忠盛の子。和歌を藤原俊成に

學ぶ。平家の京を没落する時、淀より引返して五條に俊成を訪ひ、歌集を出し、その歌の勅撰集の選に入らんことを請ふ。俊成千載集を撰ぶに當り、故郷の花一首を採る。此の事平家物語に在り、後諸曲等にも作る。

○デモステネス (Demosthenes) 希臘アテーネの雄辯家。(前三八五—前三二二)

○テミストクレス (Themistocles) 希臘アテーネの政治家。(前五三〇—前四六〇)

○バイエルン (Baiern) 南獨逸に在る、獨逸聯邦の一王國。

○バーデン (Baden) ウルテンベルヒの西に在り。

○パン・ヘレニック (Pan hellenic) 全希臘人の義。

○ピット (William Pitt) 英國の政治家。(一七五九—一八〇六)

○人麿 (持統・文武の兩朝に仕へたる人。和歌を以て其の名高く、世に歌聖と稱す。

○フォックス (Charles James Fox) 英國の政治家。(一七四九—一八〇六)

○ヘッセン (Hessen) バーデンの北に在り。

○ロマンス (Romance) 英雄・神仙・傳説中の人物等を其の材とし、結構脚色に重きを置きて作られたる物語。

○五嶽・五鎮 (五嶽は白頭山・智異山・金剛山・妙香山・三角山。五鎮は三角山・長白山・俗離山・五臺山・九月山。

○金剛山 (江原道の東北に峙つ。朝鮮第一の靈山として其の名高し。

○白頭山 (滿洲、朝鮮の境をなす山。長白山の最高峰、海拔九千呎。

○妙香山 (平安道价川に在り。

○ヘロドトス (Herodotus) 希臘の歴史家。歴史家の祖と稱せらる。(前四八四—前四二四)

○ヘンリー第六世 (英國王。ヘンリー五世の子。紀元千四百二十二年王位に即く。

○本阿彌 (刀劍鑑定の家柄の名、足利時代の刀磨ぎにして刀劍鑑定に長ぜし松田某の末を代々稱す。

○本門寺會式 (本門寺は日蓮宗にして、東京府荏原郡池上村に在り。日蓮宗にて毎年十月祖師日蓮の忌日に行ふ佛事を會式とす。

○正宗 (鎌倉の刀匠、姓は岡崎、五郎入道と稱す。

○ミュンヘン (Munchen) バイエルンの首府、湯島 (江戸、神田川の北に當る高地、今本郷區に屬す。

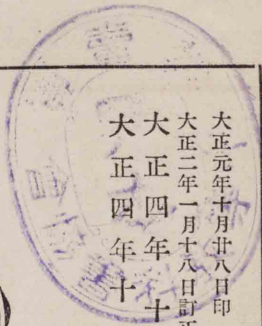
○ライプチヒ (Leipzig) ザクセンの都市。

○レモン色 (Lemon) とす。果實の色より起る。黄赤色なり。

○廉頗 (趙の人、武勇を以て聞ゆ。藺相如と共に趙の柱石の臣なり。

○ローズベリー (Archibald Philip Primrose, Earl of Rosebery) 英國自由黨の政治家。(一八四七—)

大正元年十月廿八日印 刷 同 年同月廿一日發  
 大正二年一月十八日訂正印刷 同 年同月廿一日訂正再版發行  
 大正四年十一月三十日訂正印刷  
 大正四年十一月二日訂正三版發行



—〔製複許不〕—

著 作 者

藤 村

作

發 行 者 兼 刷 行 者

東京市京橋區銀座一丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

右代表者

專務取締役 宮川保全

東京市京橋區銀座一丁目廿二番地

大日本圖書株式會社

郵便振替貯金口座 東京三二九番

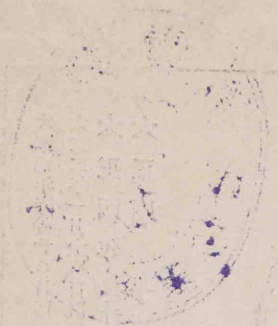
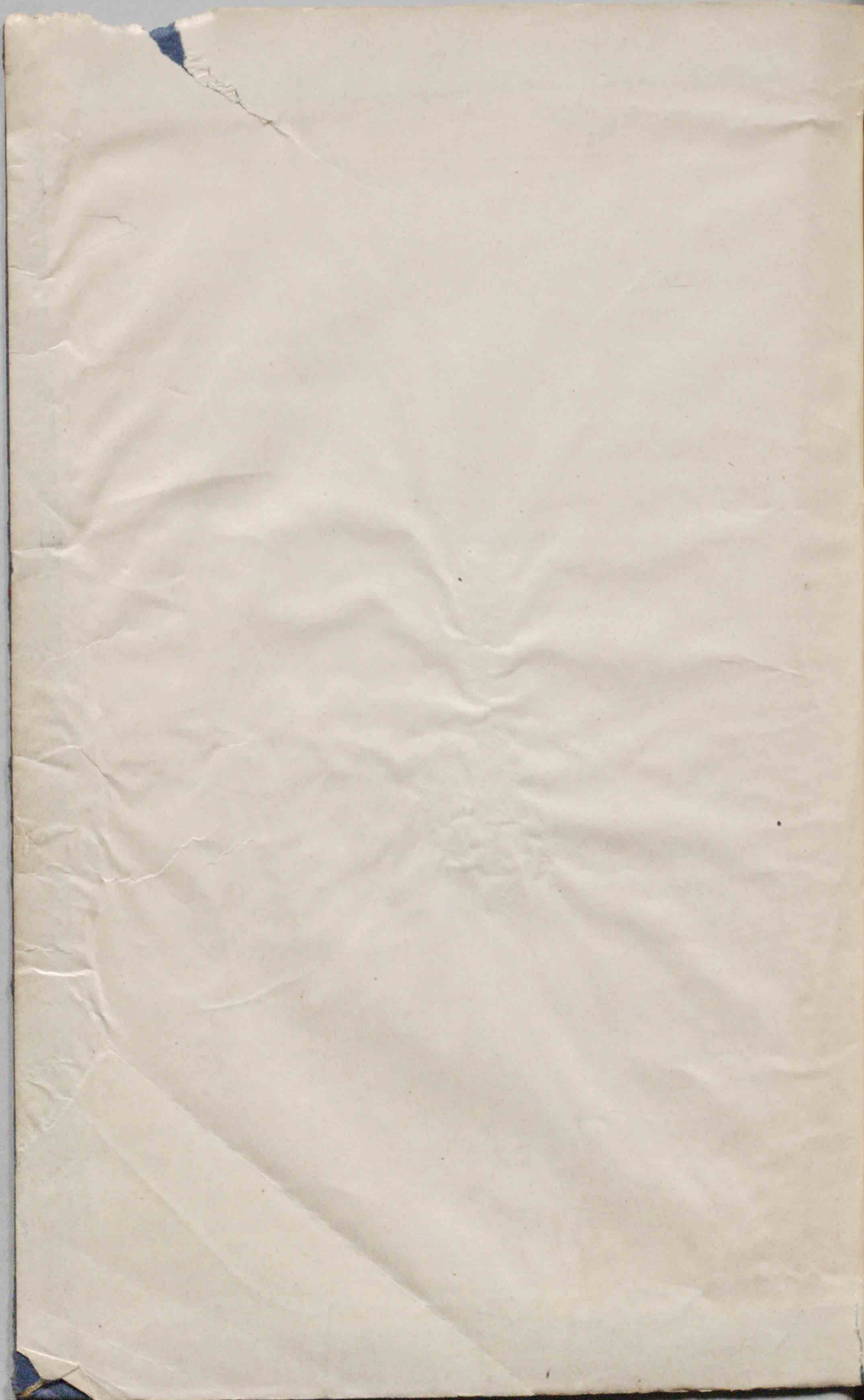
發 行 所

各府縣下特約販賣所

增補大正讀本與附  
 定 卷一 金參拾貳錢  
 自卷二 各金參拾錢  
 至卷三 各金貳拾八錢  
 至卷十







The right page contains several columns of extremely faint, illegible text. The text is arranged in a structured manner, possibly as a list or a table, but the characters are too light to read. There are also some faint vertical lines that might be part of a form or a ledger.

